大分県文化財調査報告書　第130輯

城　前　遺　跡

－県道赤根真玉線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－

２００１

大分県教育委員会

城　前　遺　跡

序　文

国東半島は、「峰入り」に代表される修験の山として独特の世界を作り上げています。またそこに住む人々も、古代以来六郷満山と総称される寺院と関わりを持ちながら生活をしてきました。

そのような地域ですから、今でも各所に古代から中世に起源を持つ景観が残されております。今回調査の起因となった県道赤根真玉線の沿線にも、六郷満山寺院の無動寺や弥勒寺などがあり、日常の生活の中にも、ごく自然にとけ込んでおります。

さて、そのような地域で県道の拡幅工事が行われることになりました。県道赤根真玉線は、以前は幅が狭く車の離合すらできないような道でしたが、増加する観光客の利便性や地元の要望などを考慮し、拡幅工事が行われました。その工事によって新たに発見、調査されたのが今回報告する城前遺跡です。

城前遺跡は、国東ではこれまでごく普通に路傍に見られた五輪塔群の地下の構造や、そのあり方などを明らかに出来た点で、注目される遺跡であります。

この報告書が地域の人々にとって、地域の歴史を見直す契機となり、また歴史の研究にも寄与できますならば幸いであります。

最後になりましたが、地元真玉町教育委員会をはじめ、調査にあたり御協力いただいた方々や関係各機関に衷心よりお礼申し上げます。

２００１年3月３１日

大分県教育委員会教育長
田　中　恒　治

例　言

１．本書は大分県高田土木事務所が実施した県道赤根真玉線道路改良工事に伴い調査を行った城前遺跡の調査報告書である。
２．調査は大分県高田土木事務所の依頼を受けて、大分県教育委員会が実施したものである。
３．付図を除く遺構の実測および現地での写真撮影は調査員が行い、遺物の実測は長野とよみと末政圭子が、写真は五十川雄也が行った。
４．付図は写真測量により、（株）佐藤設計コンサルタントが行った。
５．出土した土器類については、県文化課資料室で保管している。石造物については調査区に隣接する清台寺のご厚意で寺の墓地に移設している。
６．本書の執筆、編集は小柳が行った。

目　　次

第１章　はじめに……1
１．調査に至る経緯と調査の経過……1
２．遺跡の立地と環境……1
第２章　調査の成果……6
１．調査の概要……6
２．遺構と遺物……6
（１）溝……6
（２）テラス……１１
（３）墓壙等……１５
（４）線刻板碑……２２
（５）板碑……２２
（６）岩屋……２３
（７）道路……２５
（８）石造物……３４
第３章　まとめ……３８
付　章　遺跡周辺の石造物……４１
写真図版
報告書抄録

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図……２
第２図　周辺の遺跡……３
第３図　遺跡周辺の地形図……５
第４図　溝実測図……６
第５図　溝出土遺物（１）……７
第６図　溝出土遺物（２）……８
第７図　遺構配置図……９～１０
第８図　第１テラス石塔出土状況……１２
第９図　第２～８テラス墓坑配置図及び石塔出土状況……１３～１４
第10図　墓壙実測図（１）……１６
第11図　墓壙実測図（２）……１７
第12図　墓壙実測図（３）……１８
第13図　掘り込み実測図……１９
第14図　墓坑出土遺物……１９
第15図　線刻板碑……２２
第16図　板碑……２２
第17図　岩屋配置図……２３
第18図　第１～３号岩屋測量図……２４
第19図　遺跡周辺旧字図……２５
第20図　旧道路側溝出土遺物（１）……２６
第21図　旧道路側溝出土遺物（２）……２７
第22図　旧道路側溝出土遺物（３）……２８
第23図　旧道路側溝出土遺物（４）……２９
第24図　旧道路側溝出土遺物（５）……３０
第25図　旧道路側溝出土遺物（６）……３１
第26図　旧道路側溝出土遺物（７）……３２
第27図　旧道路側溝出土遺物（８）……３３
第28図　石塔実測図（１）……３４
第29図　石塔実測図（２）……３５
第30図　石塔実測図（３）……３７
第31図　遺跡周辺の石造物……４２

表　目　次

第１表　周辺遺跡一覧表……４
第２表　出土土器観察表……４３
第３表　出土陶磁器観察表……４６

写真図版目次

図版１　遺跡全景
図版２　溝、墓壙群近景、第３テラス、第５テラス、第４テラス
図版３　第５テラス、第８テラス、磨崖板碑、第１号岩屋、第２号岩屋、第３号岩屋
図版４　第１号坑検出状況、第８・７号、第11・10号、第13・12号、第15・14号、第18・17号、第47・48号坑検出状況、第47・48号
図版５　板碑、道路跡、清台寺墓地、板碑３、板碑４、清台寺、薬師堂国東塔
図版６　墓坑出土遺物、中世溝出土遺物、近世道路側溝出土遺物
図版７　近世道路側溝出土遺物
図版８　石造物

第１章　はじめに

１．調査に至る経緯と調査の経過

城前遺跡は未周知遺跡であったが、平成９年の県道関係の事前分布調査によって、工事により削平される山の斜面に石造物が多数あったことがわかった。この時点で既に工事のために移転しており、移転した跡には基礎の真新しいスタンプが残されていた。幸い地下の掘り返しは行われていなかったため、この部分の本調査を行うことになった。また、山裾部の平坦部については遺構確認調査をおこなった結果、中世の溝が確認され、さらに山裾に五輪塔が散乱しているのが確認されたため、山の斜面から平坦部に掛けて本調査を行うこととなった。

また、本調査対象地区の東側にのびる丘陵の斜面も、本調査と並行して確認調査をおこなった。

２．遺跡の立地と環境

国東半島の東部に位置する真玉町は、半島中央部の両子山麓から流れ出る真玉川の流域を中心として東西に長く広がる町である。町域の東側半分は国東半島独特の奇岩が織りなす地形が展開するのに対して、西側半分の海岸部は、低平な丘陵と細長い小平野が交互に展開する地形となり、まったく対照的な景観をなしている。

この自然条件の差が、ここに展開する歴史にも大きな影響を与えている。特に中世の開発に係わる荘園（真玉荘、「弘安図田帳」〈②〉参照）と六郷山（無動寺など）の成立と展開は、地域的に見事に色分けされている。すなわち、条里の残る海岸平野部を中心として展開する真玉荘に対して、いわゆる「安貞目録」（①）に見られるように、山岳部に展開する六郷山寺院という図式である。

その時、城前遺跡のある城前地区ははたしてどちらに属していたのだろうか。もちろん時代によって移動はあろうが、基本的に真玉荘の領域に属し、その最も上流側に位置すると考えられる。つまり、城前地区は六郷山の領域と荘園の領域との接点にあたるとすることができるのである。

①

六郷山諸勤行并諸堂役祭等目錄寫

豐後國六郷山諸勤行并諸堂役祭等目錄

中略

一黑土石屋（木松坊）、本尊馬頭觀音、仙室年中勤修正月會正月四日、觀音講毎月十八日、日次勤初後入堂讀誦經典、六所權現於御寶前、二季祭五節供等、今始御祈禱長日觀音經卅三卷、同千手陀羅尼卅三遍、

一四王石屋、本尊四天王、仙室年中勤修正月會正月三日、毘沙門講毎月三日、初後入堂讀誦經典、今始御祈禱長日毘沙門行法一座、

一小岩屋（無動寺）山、本尊藥師如來、年中勤修正月會自正月六日至八日三ケ夜勤之、修二月會自二月一日同至三日、一夏九旬不斷供花七月十五日布薩、一日轉讀大般若會十月十五日請僧廿人、修八座問答講、三ケ日夜法華不斷經自十月廿三日同至廿五日勤也、天台大師供十一月廿四日、佛名十二月廿日、月並勤藥師講毎月八日、往生講毎月十五日、百座仁王講毎月一日、一萬卷心經會毎月一日、日次勤初後入堂讀誦經典、六所權現於御寶前、二季祭五節供等、今始御祈禱長日轉讀大般若經一袂、藥師經十二卷、藥師行法一座、

一大岩屋（願成寺）、本尊千手觀音深山、年中勤修正月會正月五日、一夏九旬安居勤觀音講毎月十八日、初後入堂讀誦經典、六所權現於御寶前、二季祭五節等、今始御祈禱長日觀音經卅三卷讀之、

中略

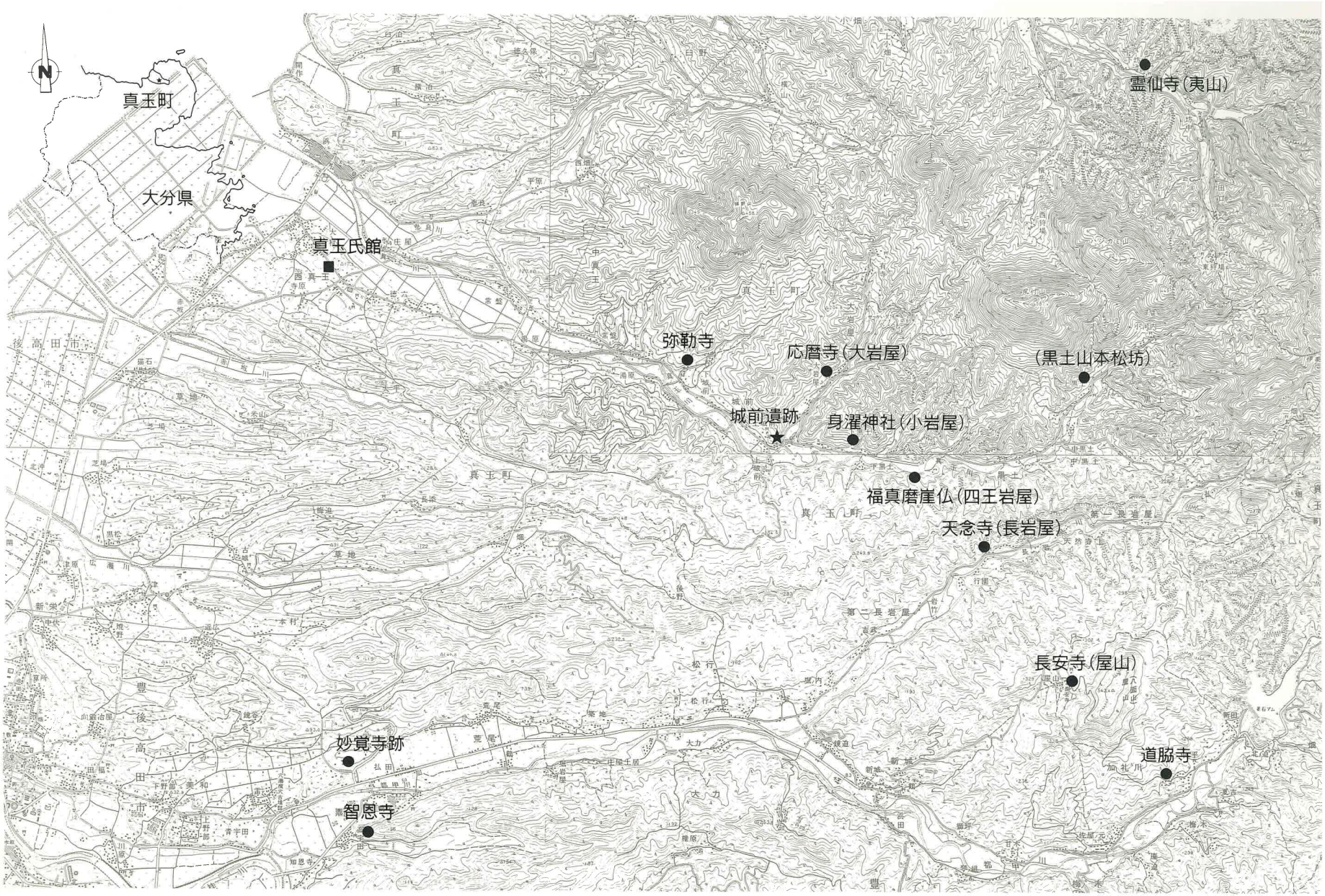
②

豐後國圖田帳案

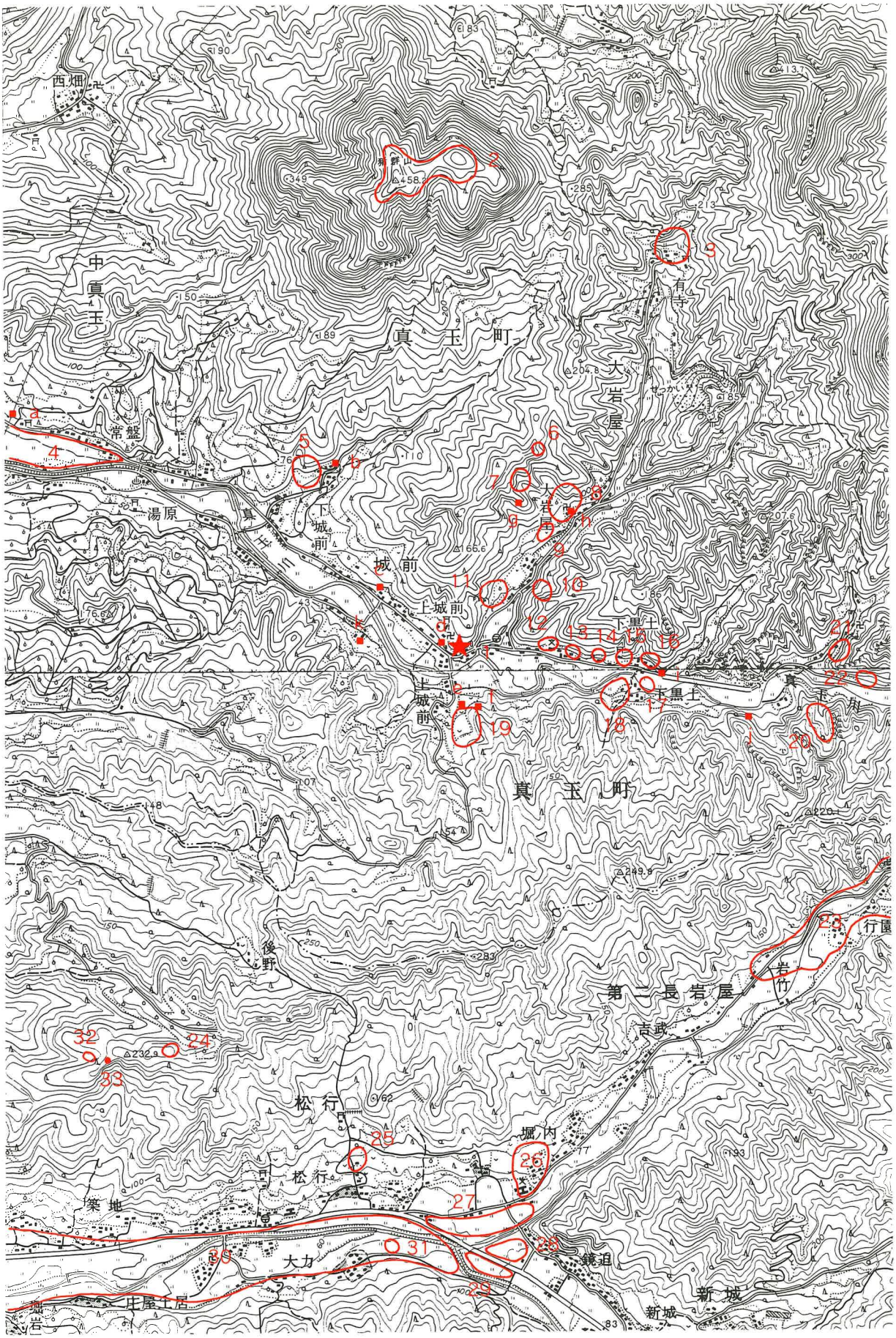
中略

眞玉荘七拾丁　宇佐彌勒寺領、眞玉左衛門次郎惟重跡嫡子文次郎惟永（又法名願心）・大貳房完秀・五郎惟村、各知行之處、豐前大炊入道殿跡六郎太郎能重（木田）論之、

中略



第1図　遺跡位置図（S＝1：50,000）



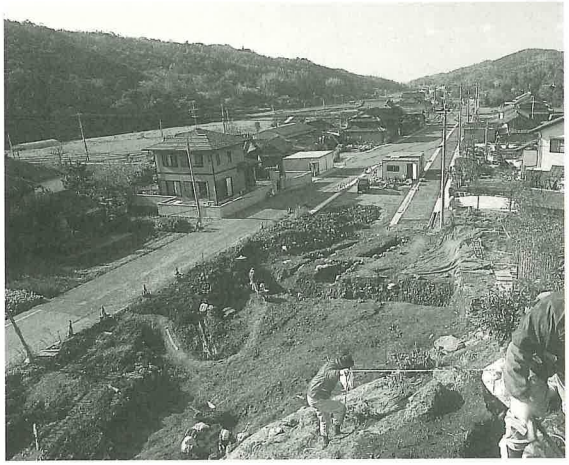
第2図　周辺の遺跡（S＝1：25,000）

1 **城前遺跡**
2 猪群山環状列石（祭祀・中世）
3 有寺（寺院・中世）
4 真玉条里（古代）
5 弥勒寺跡（寺院・中世）
6 応暦寺奥ノ院（寺院・中世）
7 応暦寺六所権現（神社・中世）
8 応暦寺（寺院・中世）
9 大岩屋下ノ丸遺跡（墳墓・中世）
10 応暦寺不動堂跡（寺院・中世）
11 下ノ丸坊跡（寺院・中世）
12 無動寺下ノ坊跡（寺院・中世）
13 無動寺中ノ坊跡（寺院・中世）
14 旧無動寺跡（寺院・中世）
15 身濯神社（神社・中世）
16 無動寺上ノ坊跡（寺院・中世）
17 無動寺東ノ坊跡（寺院・中世）
18 無動寺西ノ坊跡（寺院・中世）
19 白丸城跡（山城・中世）
20 無動寺中畑坊跡（寺院・中世）
21 無動寺仏性坊跡（寺院・中世）
22 無動寺講堂跡（寺院・中世）
23 天念寺（寺院・中世）
24 大畑経塚（古代）
25 金宗院跡（寺院・中世）
26 筧城跡（城郭・中世）
27 小樋遺跡（包蔵地・縄文）
28 横田遺跡（包蔵地・縄文、弥生）
29 スキサキ遺跡（集落・弥生、古墳）
30 荒尾・払田条里（古代）
31 イセダ遺跡（集落・中世）
32 柳谷遺跡（生産・中世）
33 大畑古墳（墳墓・古墳）

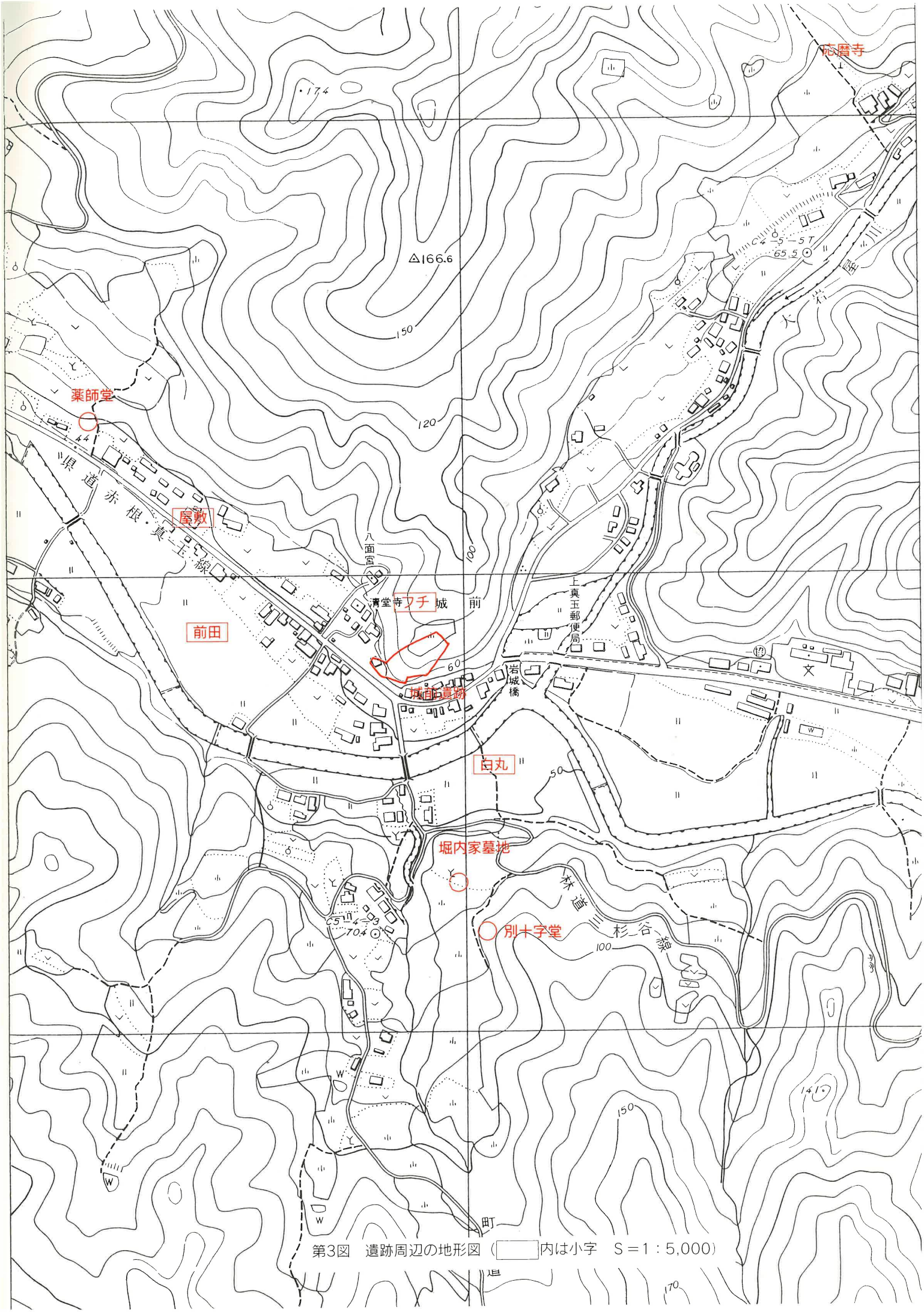
a 山田家国東塔○
b 三社権現宝篋印塔○
c 薬師堂国東塔
d 清台寺宝塔○
e 堀内家墓地国東塔
f 別十字堂跡磨崖宝塔○
g 堂の迫磨崖仏◎
h 応暦寺宝篋印塔◎
i 中之坊磨崖仏○
j 福真磨崖仏◎
k 堀内家国東塔○

◎県指定　○町史定

第1表　周辺遺跡一覧表



調査風景



第3図　遺跡周辺の地形図（　　内は小字　S＝1：5,000）

第２章　調査の成果

１．調査の概要

調査は、真玉川に向けて突き出した丘陵の先端部分（山の斜面）と、その下の平坦部分の計800㎡で行った。さらに、板碑が１基単独で建っていた調査区東側の丘陵斜面についても、平坦面（テラス）を中心として確認調査を行った。

その結果、山裾の平坦部で中世前半の溝１条と近世の道路状遺構とそれに伴う側溝が確認され、山の斜面部では数カ所のテラスを形成し、五輪塔などの石造物を立てた中世の墓地が確認された。また、山裾には調査区外も含めて３ヶ所の岩屋状の掘り込みが認められた。

まず、平坦部の中世の溝は幅３㍍、深さ２㍍と該期の溝としては大きく、山に向かって一直線（川に垂直）に伸びている。堆積状況も加味すると、この溝は水路ではなく、何らかの区画をなす溝であった可能性が高い。

同じく平坦面で確認された近世の道路状遺構は、北側に側溝を有し、東西方向に延びている。調査の前にはこの部分は宅地であり、道路の痕跡は無かったが、明治２１年に調製された字図では確認できることから、それ以後廃絶したものであろう。

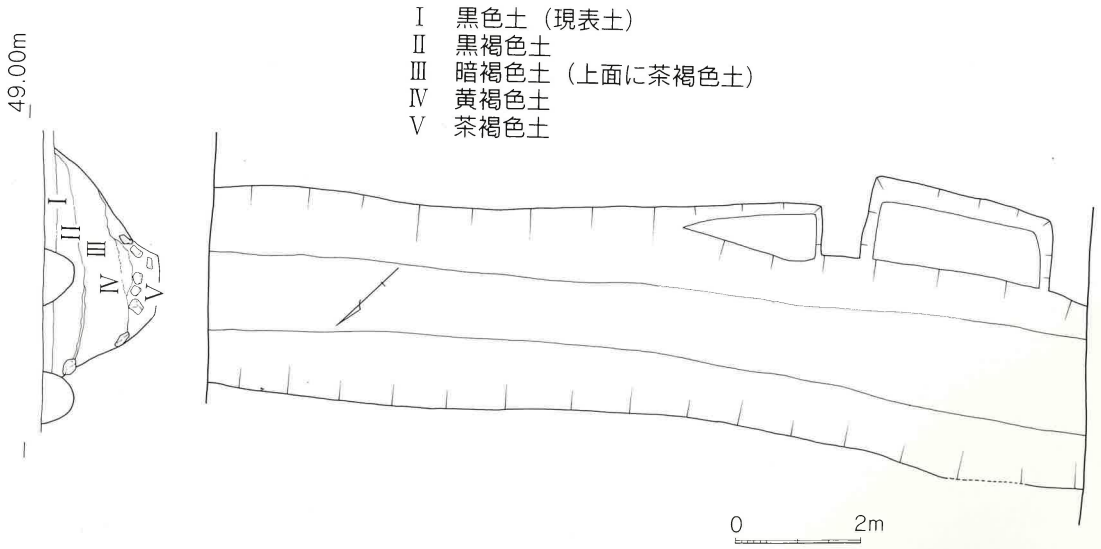
山の斜面では中世の墓地と、それに伴う石造物が検出された。墓坑は計50基あり、それ以外にも板碑を建てたと思われる穴も確認されている。

２．遺構と遺物

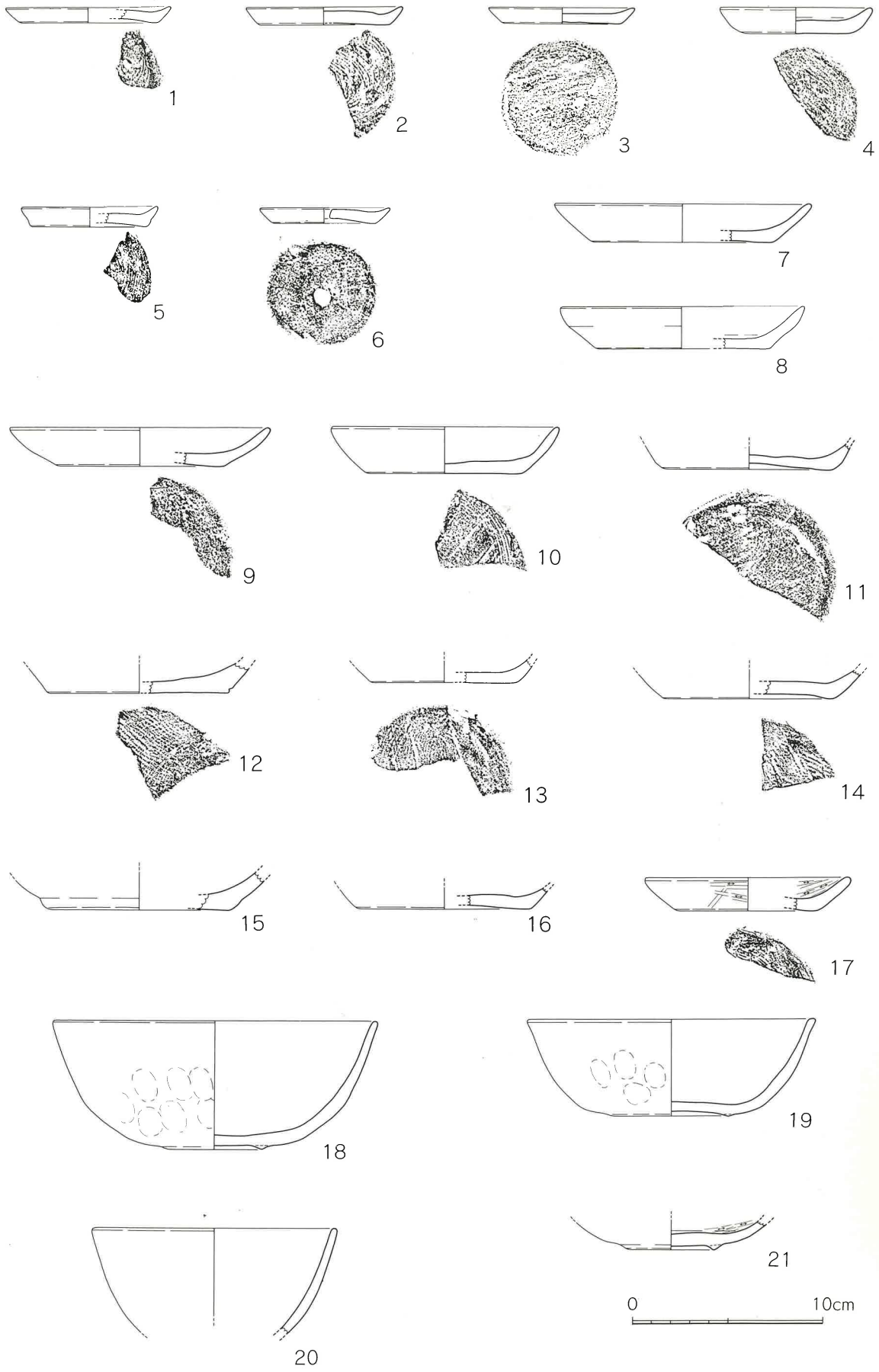
（1）溝

調査区西側の平坦部で確認された。溝は幅３㍍、深さ２㍍、断面箱形で、南北に直線状に延び、北側は山に接続する可能性が高い。調査区の北端ではわずかに地山が張り出しつつあり、おそらく１～２㍍のうちに山裾に接続するものと思われる。

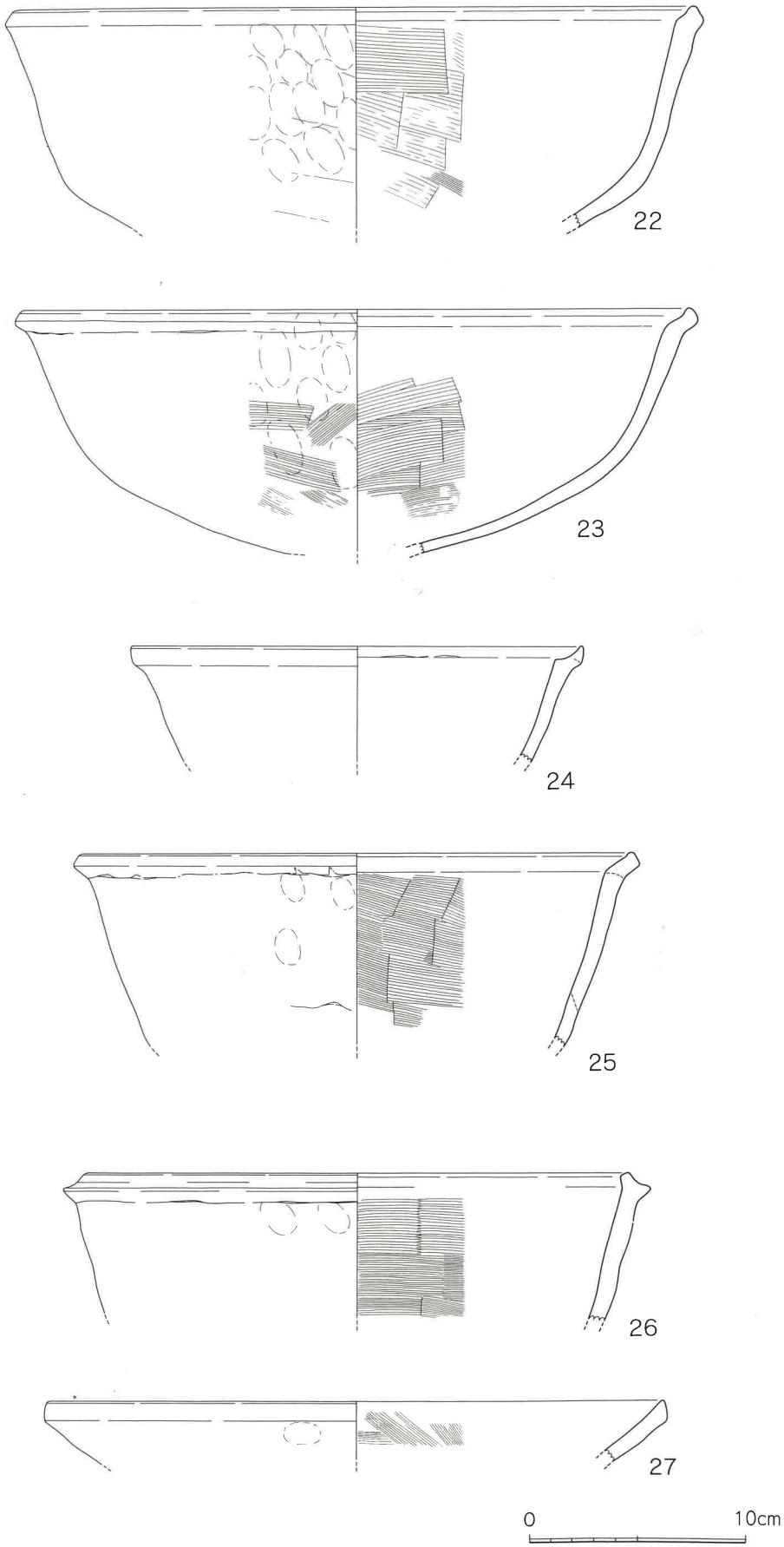
遺物は、１から27までが溝出土遺物である。１から６は小皿、７から16は坏、17から21は瓦器。17は皿、18から21は椀。椀はわずかに高台の痕跡を認めることができる。22から26は鍋、27は鉢。鍋は口縁部を小さく折り、わずかに上方につまみ上げるものと口縁下部に一条の突帯を巡らせるものがある。



第４図　溝実測図



第5図　溝出土遺物（1）



第6図　溝出土遺物（2）

遺跡全景

第7図　遺構配置図　（S＝1:500）

（2）テラス

調査区東半の丘陵斜面には、小さな平坦面が８ヶ所形作られており、それぞれに石造物や墓壙が認められた。第１テラスは、大きな石造物が立ち並んでいたもので、最も標高の高い部分にある。平坦面からの比高差は９㍍で、丘陵の中段あたりになる。テラスは２から３段の石段を積み、平坦面を確保している。調査に至る経緯でも触れたように、すでに我々が確認した時点では石造物は移転しており、その痕跡が残されているのみであった。調査では慎重に掘り下げを行ったが、墓壙は確認することができなかった。

第２テラスは第１テラスから3.5㍍下がったところにあり、平坦面からの比高差は5.5㍍となる。テラスは幅0.5㍍、長さ1.2㍍ほどの狭いもので、石造物は無かったものの、４ヶ所の墓壙が確認された。

第３テラスは第２テラスの下に位置するもので、平坦部からの比高差は４㍍である。幅0.4㍍、長さ3.8㍍と細長い。ここでは墓壙は確認されなかったが、五輪塔が２基据えられた状態で発見された。

第４テラスは、第３テラスの下にあり、平坦部からの比高差は2.5㍍である。本来はさらに西側に延びていたと考えられるが、現状で平坦面をなすのは幅1㍍、長さ3.3㍍である。多くの石造物が倒れた状態で発見され、墓壙も一ヶ所確認されている。

第５テラスは調査区の中央部に位置し、最もしっかり作られたテラスである。幅0.7㍍で長さ6.1㍍であるが、本来はもう少し東側に延びていたかもしれない。西側はコーナーを作って終わる。背後の垂直面は高さ１㍍ほどで、大部分は表面が剥落しているが、残っている部分には直線的な線刻が複数認められ、さらに上部に板碑の額状の突出部もわずかに認められたことにより、背後の垂直面全面に線刻板碑が作られていたと推測できる。（後述）

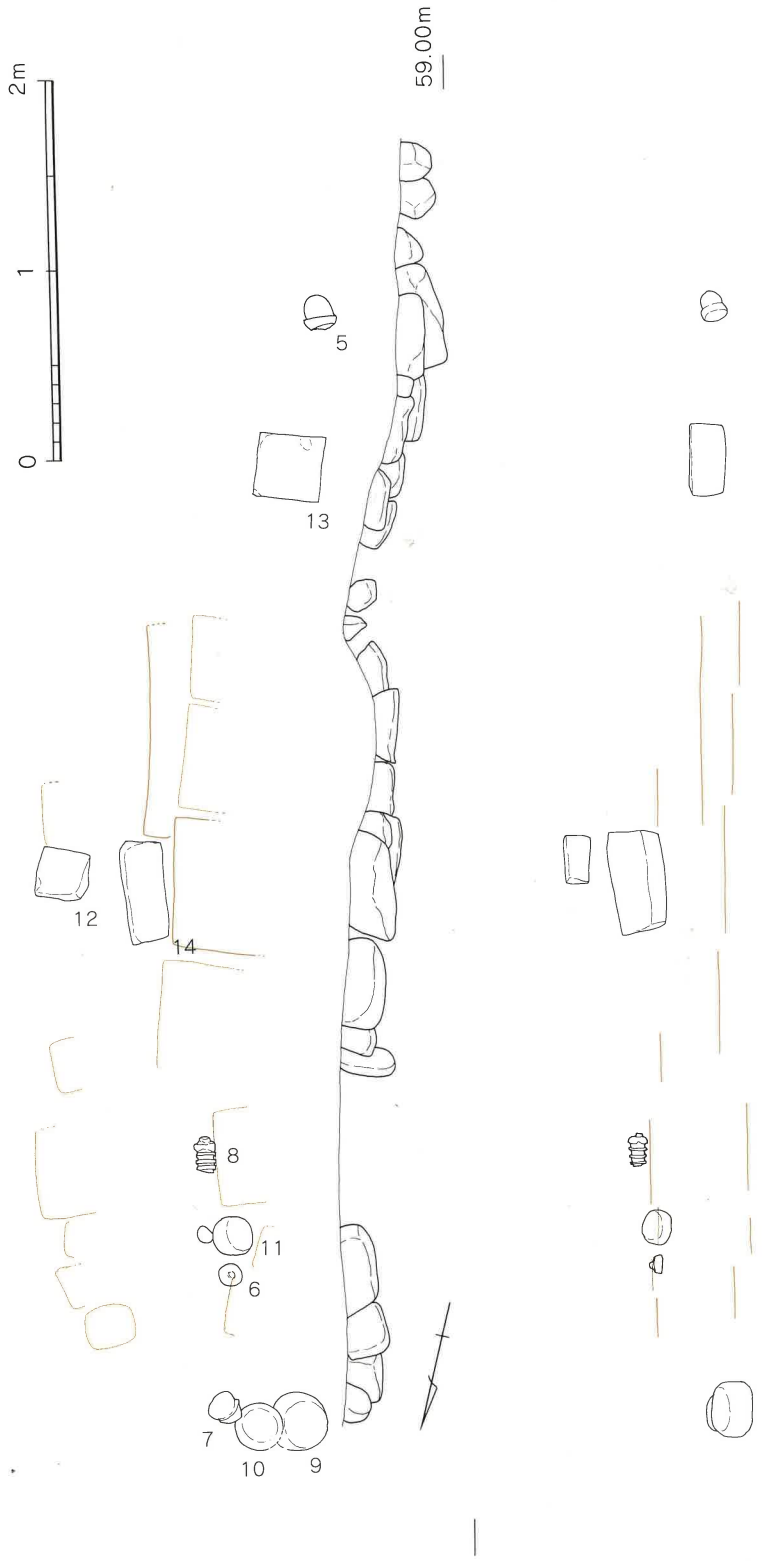
このテラスは、深い墓壙は認められなかったが、五輪塔を据えたと考えられる浅い掘り込み３ヶ所と、板碑を据えたと考えられる細長い浅い掘り込み２ヶ所があった。石造物は大部分原位置を保っていないが、多く出土している。

第６テラスは、最も大きなものであるが、明確な平坦面をなしていない。おそらく後世の風化や地崩れが影響したものと考えられる。現状でテラス状をなしているのは、幅最大で２㍍で長さ10㍍であるが、西側は調査区外にも延びる。平坦部からの比高差は２㍍である。このテラスでは石造物は全く出土しなかった。それは、調査開始前まで第５テラスとの間に山に登る細い道があり、その道から西側（第６テラス側）は隣接する清台寺の寺域になり、以前から石造物は片づけていたとのことであるので、本来はここにも石造物があったものである。（片づけたとされる住職は既に他界し現在どこにあるのかわからないが、調査区に隣接する清台寺墓地に第１テラスから降ろした石造物の他、多くの五輪塔や板碑があるので、この墓地にあるものの内の一部である可能性が高い。）

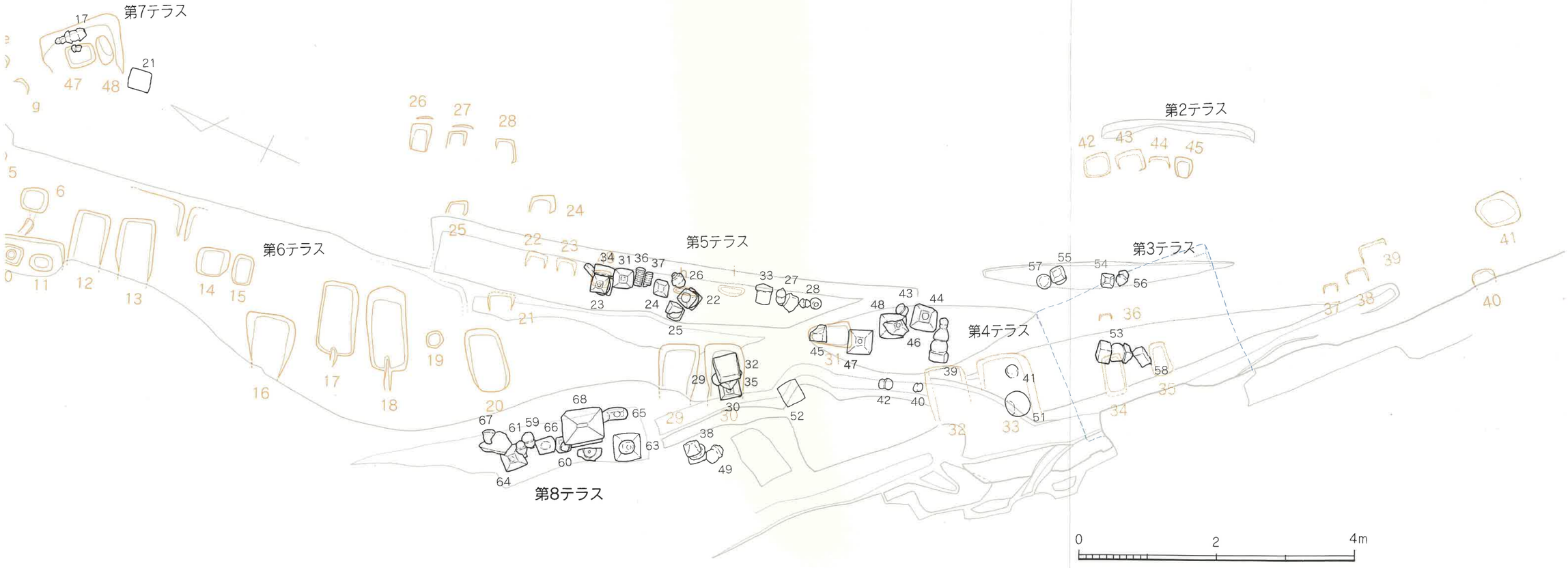
墓壙は、基本的に二基が一組となっており、それを画する更に大きな掘り込みを有するものがある。また、テラスの西側部分には、細長い掘り込みが６ヶ所認められ、おそらく板碑を建てていたものであろう。それも含めて28ヶ所の墓壙や掘り込みがある。

第７テラスは第６テラスから1.5㍍登ったところにある小さなテラスである。1.3㍍四方で、平坦部からの比高差は４㍍である。このテラスは調査前には全く斜面で土に覆われていたが、表土剥ぎの結果、五輪塔が３基と五輪塔のものと思われる地輪２基が出土したことから、確認されたものである。五輪塔は横倒しになっていたが、ほとんど原位置を動いていないと考えられる。五輪塔の下には板状の安山岩があり、その下に２ヶ所の墓壙が穿たれていた。

第８テラスは平坦部から１㍍の高さにあり、幅60㌢で長さ４㍍である。江戸時代と考えられる石造物があり、このテラスは中世以降に削られたものであろう。

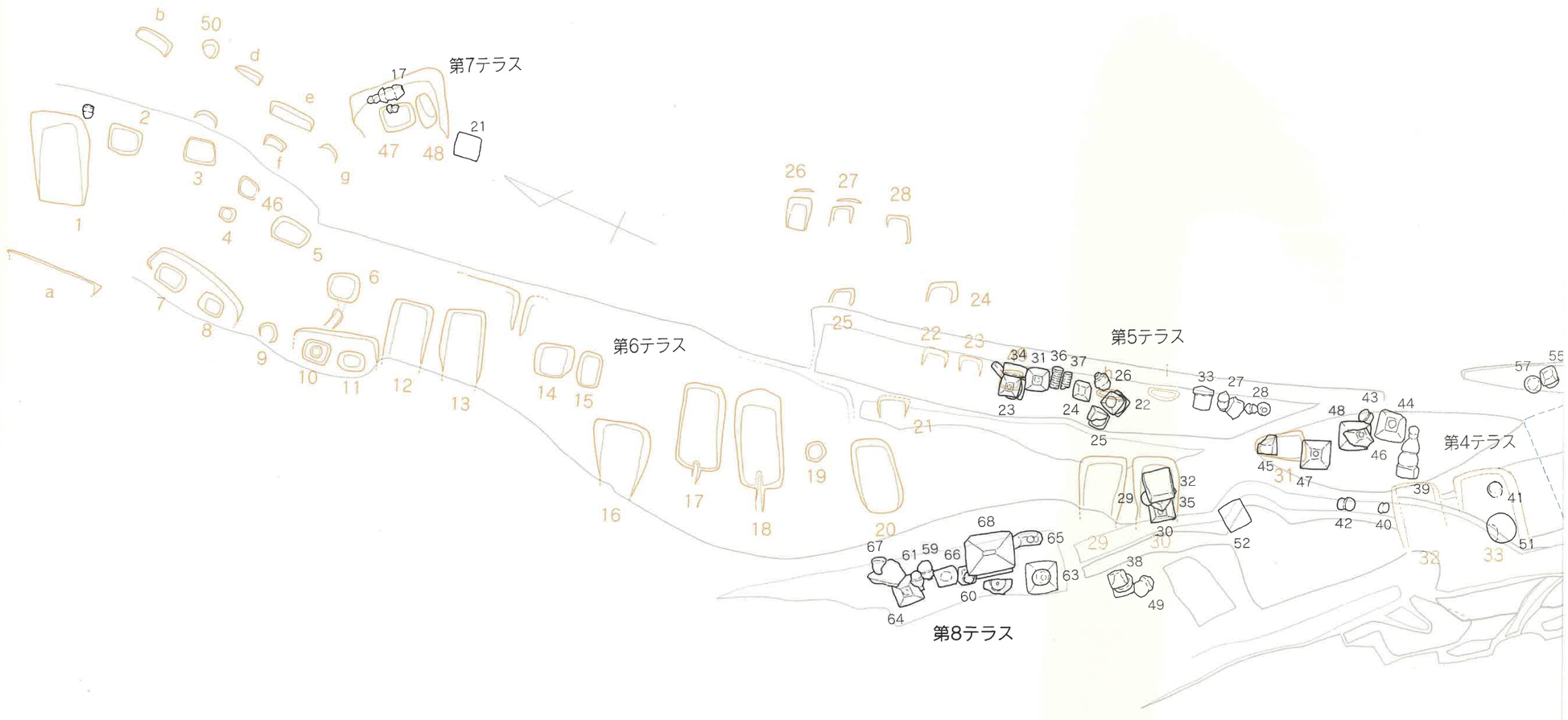


第８図　第1テラス石塔出土状況　（図中の番号は第28図の石造物を示す。茶色は石造物の基礎のスタンプを示す。）



（図中の番号は第29、30図の石造物を示す。）

第9図　第2～8テラス墓壙配置図及び石塔出土状況



第9図　第2～8テラス墓壙配置図及び石塔出土状況

（3）墓壙等

墓壙は合計50基確認されている。また、さらに板碑を立てたと思われる長方形や長楕円形の掘り込みも９基あり、ここで併せて説明をしたい。なお、これらの墓壙等はいずれも表土を除去し山の岩盤を露出した状況で検出したもので、いずれも岩盤を刳りぬいている。

１号坑

検出時には礫や板状安山岩、五輪塔空輪が充填された状態であった。斜面下側は消滅しているが、短軸長68㌢、長軸残存長1.14㍍である。遺物の出土はない。調査区の最も北側に位置しており、調査区外に１号と平行してややくぼみが認められるので、おそらく２基でセットをなしていたと思われる。

２号坑

１号に隣接する。長軸長42㌢、短軸長32㌢の長方形を呈し、深さは12㌢である。遺物の出土はない。

３号坑

長軸長40㌢、短軸長30㌢の長方形を呈し、深さは17㌢である。遺物の出土はない。

４号坑

調査区北側にあり、単独で存在する。一辺18㌢の方形を呈する。深さは11㌢である。遺物の出土はない。

５号坑

長軸長48㌢、短軸長30㌢の長方形を呈し、深さは8㌢である。遺物の出土はない。

６号坑

墓壙は単独で存在し、40㌢×35㌢のやや丸みを帯びた長方形を呈する。深さは山側で20㌢である。この墓壙でもっとも特徴的なのは、斜面下側に向かってトンネル状に排水溝が掘られていることである。トンネルの外側では、さらに斜面下に向かって20㌢ほど幅14㌢の溝が延びる。墓壙内からの出土遺物はないが、墓壙上部で浮いた状態で五輪塔の風輪が出土している。

７、８号坑

２基ともやや長方形で、両者を囲む１段目の掘り込みを有する。７号は短軸長26㌢で長軸長38㌢、深さ20㌢。８号は短軸長26㌢、長軸長31㌢、深さ17㌢である。1段目の掘り込みは、斜面上側に残っており、長さ1.4㍍で高さは25㌢ある。

９号坑

７、８号と１０、１１号にはさまれる位置にある。直径23㌢の円形で、深さは12㌢である。出土遺物はない。

１０、１１号坑

この２基は、いずれも楕円形を呈し、さらに２基を囲む大きな掘り込みを有するなど、密接な関係を示す。大きな掘り込みは、長さ1.0㍍、深さ20㌢で、斜面下側では消滅している。１０号坑は２段掘りになっており、一段目は39㌢×30㌢、２段目は22㌢×20㌢のやや楕円形を呈している。深さはそれぞれ12㌢で、全体の深さは24㌢となる。２段目の底面からは焼骨が出土している。１１号坑は、33㌢×24㌢の楕円形で、深さは18㌢である。内部からは出土遺物はない。

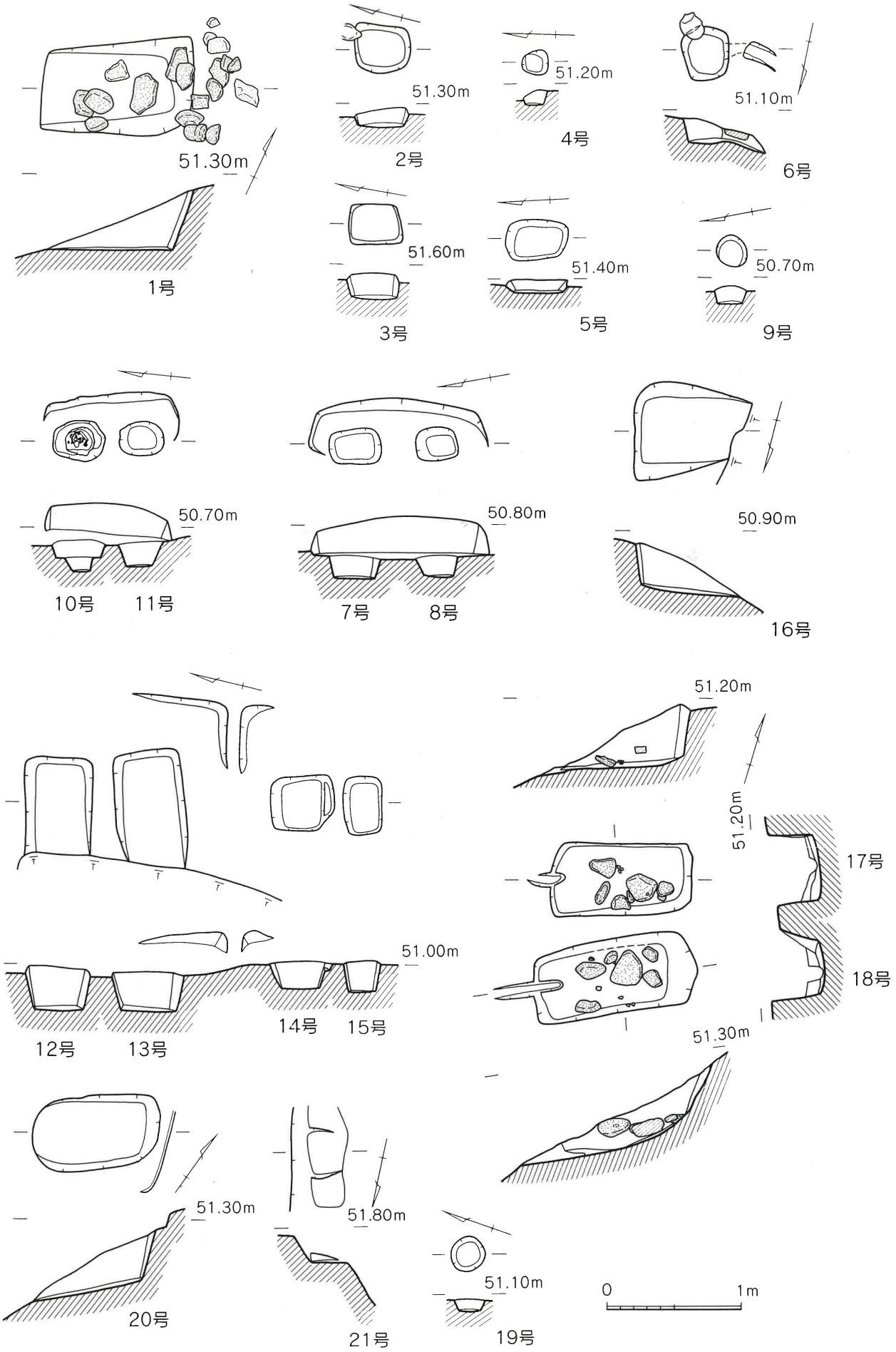
１２、１３号坑

２基はほぼ平行に作られており、いずれも斜面下側は崩落により消滅している。また、この２基を取り囲むように１段目の掘り込みが存在した可能性が高いが、現状では南東隅部が残っているのみである。１２号は、短軸50㌢で、長軸は残存長72㌢である。深さは斜面上側で35㌢である。１３号は短軸54㌢で長軸は残存長91㌢、深さは30㌢である。いずれも遺物の出土はない。

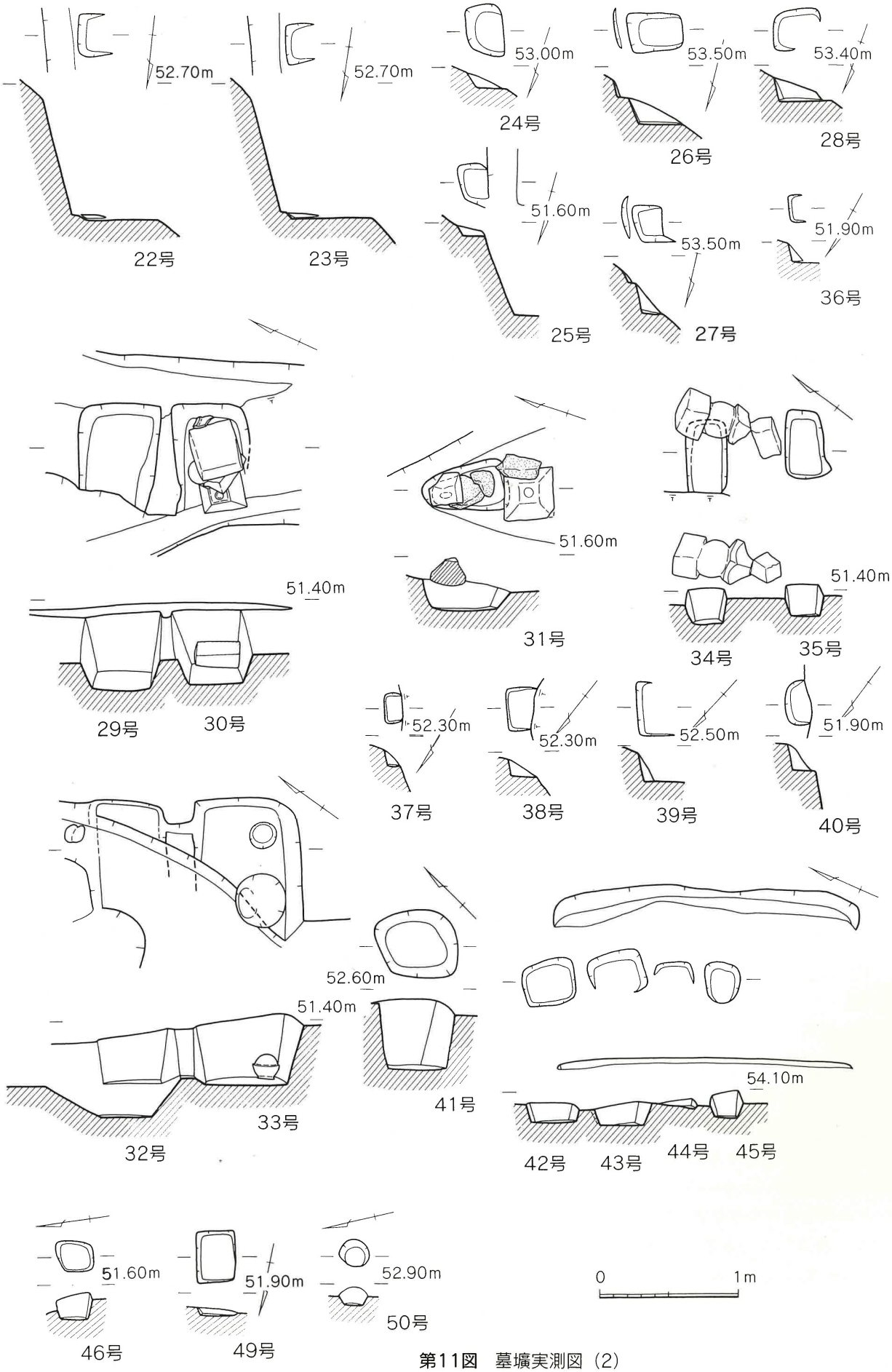
１４、１５号坑

２基はほぼ平行に作られており、また、この２基を取り囲むように１段目の掘り込みが存在した可能性が高いが、現状では北東隅部が残っているのみである。１４号は、一辺40㌢の方形を呈し、南側に一段浅い掘り込みがある。深さは21㌢である。１５号は短軸28㌢で長軸長42㌢、深さは23㌢である。いずれも遺物の出土はない。

１６号坑


51.30m
1号
51.30m
2号
51.20m
4号
51.10m
6号
51.60m
3号
51.40m
5号
50.70m
9号
50.70m
10号
11号
50.80m
7号
8号
50.90m
16号
51.20m
51.20m
17号
18号
51.00m
12号
13号
14号
15号
51.30m
51.30m
20号
51.80m
21号
51.10m
19号
0
1m

第10図　墓壙実測図（1）


52.70m
22号
52.70m
23号
53.00m
24号
53.50m
26号
53.40m
28号
51.60m
25号
53.50m
27号
51.90m
36号
51.60m
31号
51.40m
34号
35号
51.40m
29号
30号
52.30m
37号
52.30m
38号
52.50m
39号
51.90m
40号
52.60m
41号
51.40m
33号
32号
54.10m
42号
43号
44号
45号
51.60m
46号
51.90m
49号
52.90m
50号
0
1m

第11図　墓壙実測図（2）

斜面下側は消滅しているが、短軸長70㌢、長軸残存長88㌢で、深さは32㌢である。遺物の出土はない。大型のタイプであるが単独で存在している。

１７、１８号坑

１７号と１８号はほぼ平行して掘られており、ともに斜面下側に向かって、床面から幅10㌢ほどの排水溝を持つなど共通点がある。１７号坑は長軸1.06㍍、短軸0.55㍍、深さ最大0.46㍍である。１８号坑は、長軸は若干山側が崩壊しているが1.14㍍、短軸0.55㍍、深さ最大で0.46㍍である。いずれも、床面は若干山側が高く、緩やかな傾斜を持っている。排水溝は、１７号が8㌢、１８号が１８㌢ほど墓坑内部に入り込んでおり、斜面下側にはそれぞれ20㌢と30㌢伸びており、山の傾斜によって終わっている。墓壙内部には、いずれも自然石が入っており、その間から土器片と焼骨と思われる骨片が出土している。

１９号坑

１８号と２０号にはさまれるように単独で存在する。直径25㌢の円形で、深さは10㌢である。遺物の出土はない。

２０号坑

斜面下側はやや削られているが、短軸長34㌢、長軸残存長96㌢で、深さは40㌢である。また、斜面上部には１段目の掘り込みがわずかに残る。高さは12㌢である。遺物の出土はない。大型のタイプであるが１６号同様単独で存在している。

２１号坑

１基単独で存在する。２２号や２３号同様、浅い掘り込みを有する。長軸（南北）長38㌢、短軸長28㌢、深さは3㌢である。遺物の出土はない。

２２号坑

第5テラスの最も北側に位置する。南北30㌢、東西は残存長26㌢で、深さは2㌢しかない。テラスを築造した際、当然土の表土は除去されていたはずであるから、本来から墓壙といえるほどの深さは有していなかったものと思われる。

２３号坑

第5テラスのに位置し、２２号に隣接する。南北32㌢、東西は残存長20㌢で、深さは3㌢しかない。２２号同様、テラスを築造した際、当然土の表土は除去されていたはずであるから、本来から墓壙といえるほどの深さは有していなかったものと思われる。

２４号坑

２５号の南側斜面にある。西側は斜面によって壊されている。南北38㌢、東西残存長28㌢、深さは11㌢である。遺物の出土はない。

２５号坑

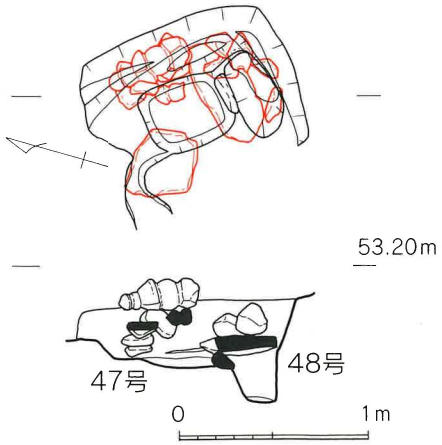
２６号から２８号のやや下位の斜面に位置し、第５テラスによって切られている。南北30㌢、東西23㌢あるが、東西方向はやや伸びる。深さは8㌢である。遺物の出土はない。

２６号坑

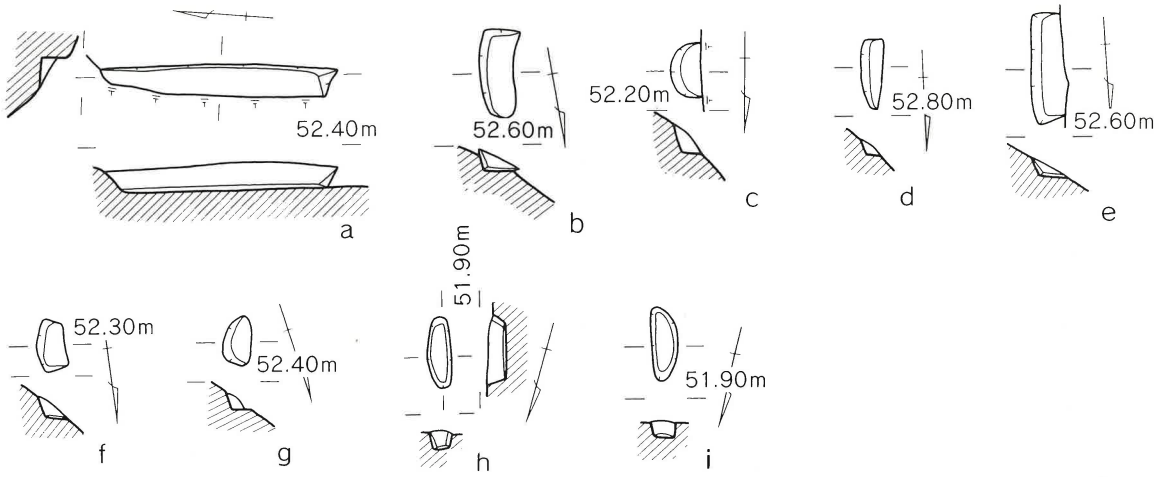
２６～２８号は明確なテラスが認められない斜面に位置する。長軸長40㌢、短軸長30㌢、深さ22㌢である。さらに斜面上部には、深さ14㌢の一段の掘り込みが認められる。遺物の出土はない。

２７号坑

２６号と並行する位置に作られる。長軸残存長28㌢、短軸長28㌢、深さ22㌢である。さらに斜面上部には、２６号同様深さ10㌢の一段の掘り込みが認められる。遺物の出土はない。



第12図　墓壙実測図（3）



第13図　掘り込み実測図

第14図　墓壙出土遺物

２８号坑

２７号と並行する位置に作られる。長軸長34㌢、短軸長30㌢、深さ15㌢である遺物の出土はない。

２９、３０号坑

２基は、ほぼ平行に接するように掘られている。いずれも後世の排水溝によって西側が破壊されている。２９号は、短軸長56㌢、長軸残存長80㌢で深さは44㌢である。３０号は短軸長55㌢、長軸残存長80㌢で深さは40㌢である。床面は２基ともかなりの傾斜を有している。３０号は、内部から五輪塔の火輪と地輪が出土した。

３１号坑

１基単独で存在する。長軸長62㌢、短軸は南側が広く36㌢、北側は25㌢、深さは22㌢である。形態は卵形を呈する。検出面で五輪塔の火輪２基が出土している。

３２、３３号坑

２基はほ平行に接するように掘られている。いずれも後世の排水溝によって西側が大きく破壊されている。３２号は、短軸長推測で60㌢、長軸残存長78㌢で深さは39㌢である。３３号は短軸長78㌢、長軸残存長1.04㍍で深さは46㌢である。３３号の内部からは五輪塔の空風輪と水輪が出土している。

３４、３５号坑

２基は、やや間が空くが、ほぼ平行に接するように掘られており、同形同大でありセットと考えられる。３４号は短軸長28㌢、長軸残存長53㌢で深さは23㌢である。３５号は短軸長28㌢、長軸残存長50㌢で深さは22㌢である。いずれも明確な角部を持った長方形の墓壙である。３４号の検出時に一石五輪塔が倒れた状態で検出されているが、本来のものかどうかは確認できない。

３６号坑

南北14㌢、東西残存長10㌢と規模が小さい。深さは15㌢である。遺物の出土はない。

３７、３８、３９号坑

３基は隣接して存在する。３７号は南北22㌢、東西残存長12㌢、深さは12㌢である、３８号は南北32㌢、東西残存長22㌢である。３９号は南北40㌢、東西残存長26㌢である。いずれも、角部をしっかり持った方形になる。

４０号坑

調査区の南側に位置する。短軸長22㌢、長軸長22㌢で深さは18㌢である。遺物の出土はない。

４１号坑

調査区の最も南側に位置する。これより南側は斜面がきつく、墓壙は存在しない可能性が高い。墓壙は50㌢×60㌢のやや胴張りの長方形で、深さは50㌢と深い。遺物の出土はない。

４２、４３、４４、４５号坑

４基は第２テラスに並んで存在する。斜面上側にはテラスを造成した掘り込みがわずかに残っている。４２号は長軸長38㌢、短軸長28㌢で長方形を呈する。深さは5㌢である。４２号は長軸長38㌢、短軸長34㌢で長方形を呈する。深さは13㌢である。４３号は長軸長40㌢、短軸長32㌢で長方形を呈する。深さは16㌢である。４４号は長軸長30㌢、短軸は残存長17㌢である。深さは5㌢である。４５号は長軸長30㌢、短軸長25㌢で隅丸の長方形を呈する。深さは18㌢である。

４６号坑

長軸長26㌢、短軸長22㌢の長方形を呈し、深さは18㌢である。遺物の出土はない。

４７、４８号坑

第７テラスにある。調査前にはまったくテラスは確認できず、表土除去作業の途中で五輪塔が出土したことから、その存在が判明した。周辺には石塔の項で述べるように、一石五輪塔３基と五輪塔の地輪２基が出土している。その内、確実に直接墓壙に伴うと考えられるのは１基（第29図17）である。五輪塔は横倒しになっていたが、周辺には五輪塔を支えていたと思われる礫があり、本来４８号坑の上に立てられていたと思われる。五輪塔の下には蓋石と考えられる板状の安山岩があり、その下部に墓壙（４８号）があった。墓壙は24㌢×48㌢の楕円形で、深さは35㌢である。４７号は４８号に隣接するが、6㌢と浅い。44㌢×36㌢の長方形である。いずれも遺物の出土はない。

４９号坑

第5テラスにあり、２３号に隣接する。２２、２３号同様浅い掘り込みである。長軸長38㌢、短軸長28㌢である。深さは5㌢である。全形のわかるこの例では、長方形を呈し、仮に五輪塔などの基礎部を据えるための掘り込みだとしたら、違和感がある。やはり、焼骨を収める穴と理解したい。

５０号坑

調査区北側で、単独で存在している。

a号坑

調査区北端に位置し、第６テラスの下側斜面にある。長さ1.27㍍、幅17㌢の長方形を呈す。斜面下側は若干の削平があると考えられる。当初、墓に至る道のスッテプとも考えられたが、この周辺に後述する同様の遺構が検出されたので、石塔を据えるための穴と考えられる。

b号坑

第６テラスの上側の斜面に位置する。長さ48㌢、幅18㌢で、深さは10㌢である。

c号坑

５０号の下位に位置する。長さ29㌢、幅10㌢で、半円形を呈す。深さは16㌢である。

d号坑

第６テラスの上側の斜面に位置する。長さ37㌢、幅12㌢で、深さは8㌢である。

e号坑

第６テラスの上側の斜面に位置する。長さ60㌢、幅18㌢で、深さは9㌢である。

f号坑

第６テラスの上側の斜面に位置する。長さ30㌢、幅15㌢で、深さは12㌢である。

g号坑

第７テラス下側にある。長さ27㌢、幅16㌢で、半円形を呈す。深さは16㌢である。

h号坑

第５テラスに位置する。長さ36㌢、幅12㌢の長方形で、深さは10㌢である。

i号坑

第５テラスに位置する。長さ38㌢、幅13㌢の長方形で、深さは8㌢である。

以上の内、墓壙と考えられるのは第１号坑から第５０号坑、石塔を立てたと思われる掘り込みは第ａ号坑から第ｉ号坑である。後者は、ｈ、ｉ号を除いて急な斜面に位置するのが特徴である。

墓壙からは第14図28～31の土師器が出土している。いずれも流れ込みの状態であり、墓壙内へ意図的に納めたものではない。28は１号坑と4号坑出土、29は15号坑と17号坑、30は1号坑、31は17号坑出土である。

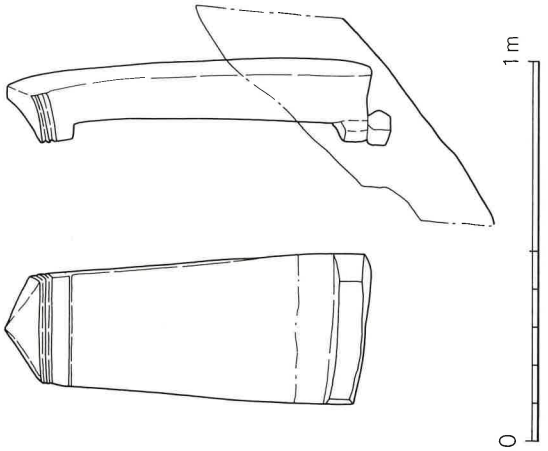
（4）線刻板碑（第15図）

第５テラスの背面に刻まれている。キャンパス面の９割以上の表面が剥落しており、残存しているのはごくわずかである。額部と考えられる部分は２ヶ所で認められ、約５㌢の突出である。連碑を分ける縦線は壁面の半分から左側の下部に残るが、現状で17本認められる。その間隔は概ね12㌢であり、壁面の長さが約６㍍であることから、本来は50基程度の連碑が描かれていたものと推測される。

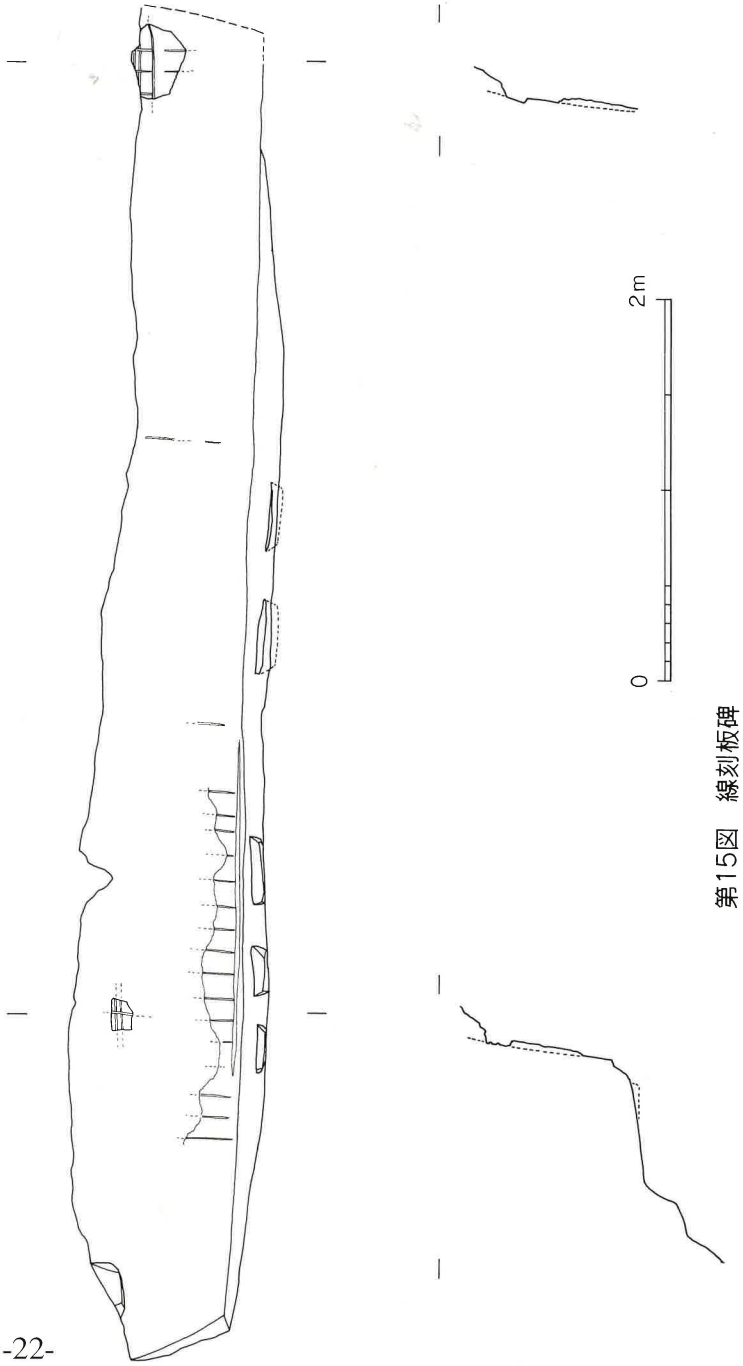
（5）板碑（第16図）

全面表土剥ぎを行った調査区の東側の丘陵斜面に、１基のみ単独で立っていた。第16図のように、下部40㌢を地中に埋め、ほぼ垂直に据えられていた。上部の額部は約６㌢突出し、また額部から頭部にかけてはやや反りながら尖る。身部はやや幅広であるが、若干背面が湾曲する。線刻や墨書などは認められなかった。

以上の形態的特徴から、本板碑は南北朝期から室町時代前半に位置づけられよう。



第16図　板碑



第15図　線刻板碑

（6）岩屋

調査区内で２ヶ所、隣接する調査区外で１ヶ所の「岩屋」が存在する。それぞれ形態が異なり、「岩屋」と呼べるものか、あるいは「がん」なのか判断できないが、一応「岩屋」という呼称で統一しておく。

第１号岩屋

調査区の中央からやや東側にある。間口は横２㍍、縦２㍍の方形で、岩屋本体は2.7㍍×２㍍の方形で、天上までの高さは2.5㍍ある。

入り口部の壁面には、幅６㍍の一段目の掘り込みが認められ（a）、その上部には斜めに直線上の掘り込み（b）もある。 後者の掘り込みは何らかの施設の屋根の庇がはめ込まれていたと考えられる。また、ほぞ穴と考えられる方形の孔も数カ所にあり、岩屋の前面に施設があったことが想定できる。

内部は最近まで物置として利用され、戦時中は拡張して防空壕としても利用していたということで、当初の形態がいまひとつはっきりしないが、二段掘りになっていることや、岩屋と一体となった施設の存在が想定できることなどから、何らかの宗教施設であったことが推測できる。遺物が全く出土していないので時期は不明とせざるを得ない。

第２号岩屋

調査区東端にある。ほぼ垂直の壁面に二段掘りで「がん」を穿ったもので、厳密には「岩屋」ではないが、仏像などを安置していたものであろう。一段目の掘り込みは縦1.5㍍、横2.2㍍、奥行き50㌢、二段目は幅1.4㍍、奥行きは20㌢である。

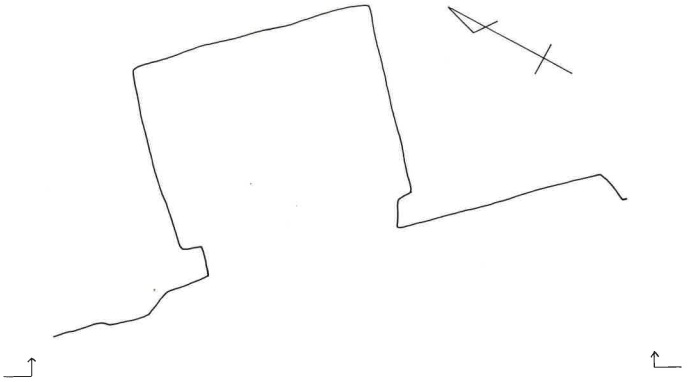
第３号岩屋

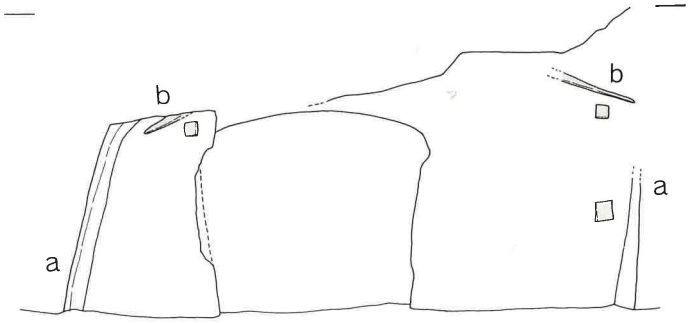
調査区に隣接する岩屋で、通称「がらじん様」と呼ばれている。間口2.4㍍、高さ1㍍で奥行き1.2㍍である。天井部から奥壁に向かっては緩やかに曲線を描く。床面は向かって右側が一段高い。壁のあり方から見て、この部分は拡張したものであろう。

内部には六体の石造人物像が安置されている。これらは、江戸時代に別の場所から持ってきたと言われており、火伏せの信仰を集めている。人物像については、烏帽子を被った男像と髪を垂れた女像、僧形の人物像の三体が大きく、他は僧形二体と髪を垂れた女神像？一体である。

調査区外であったため、内部の発掘調査は行っていないので遺物の出土はない。

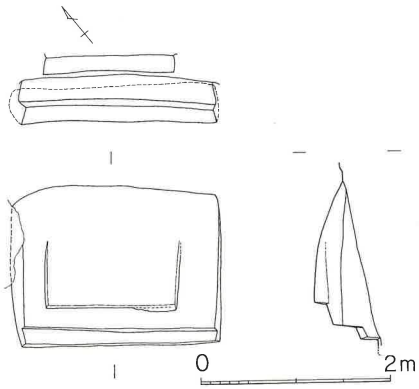
第17図　岩屋配置図



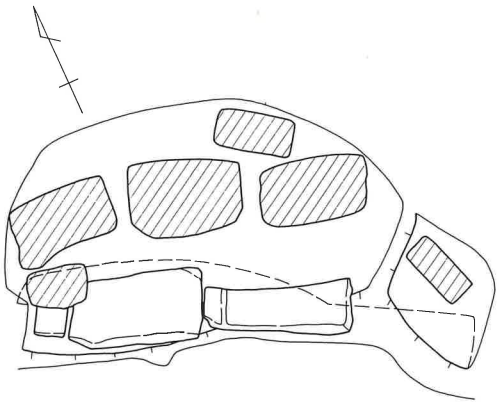


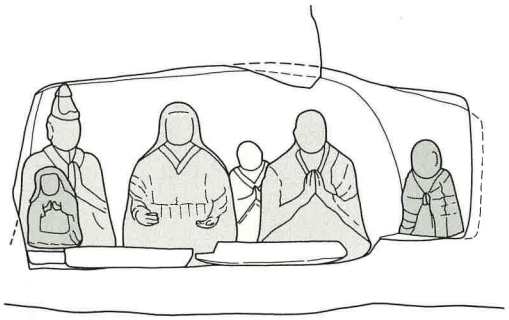
第1号岩屋

0　2m



第2号岩屋





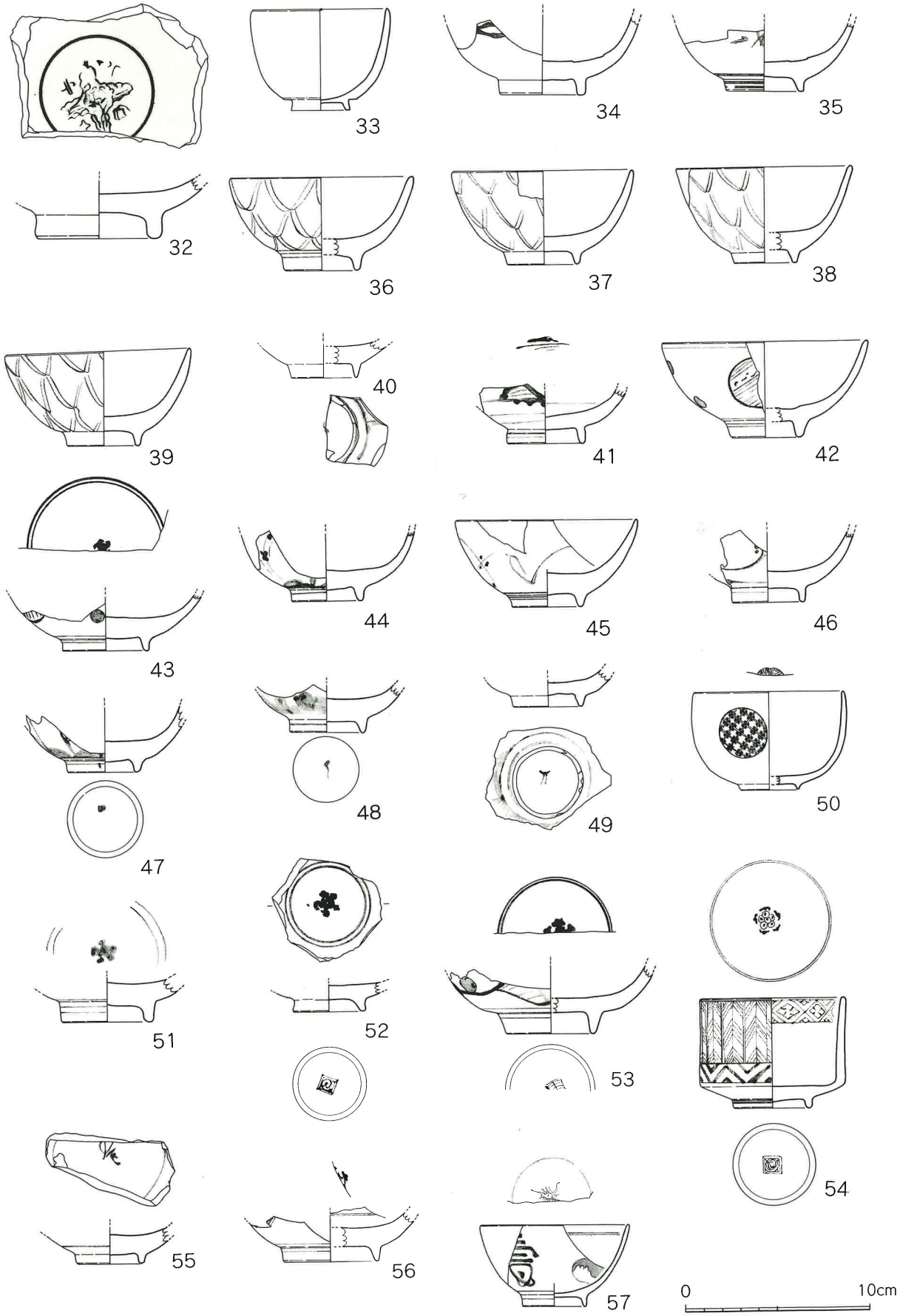
第18図　第1～3号岩屋測量図　　第3号岩屋（ガラジン様）　0　1m

（7）道路

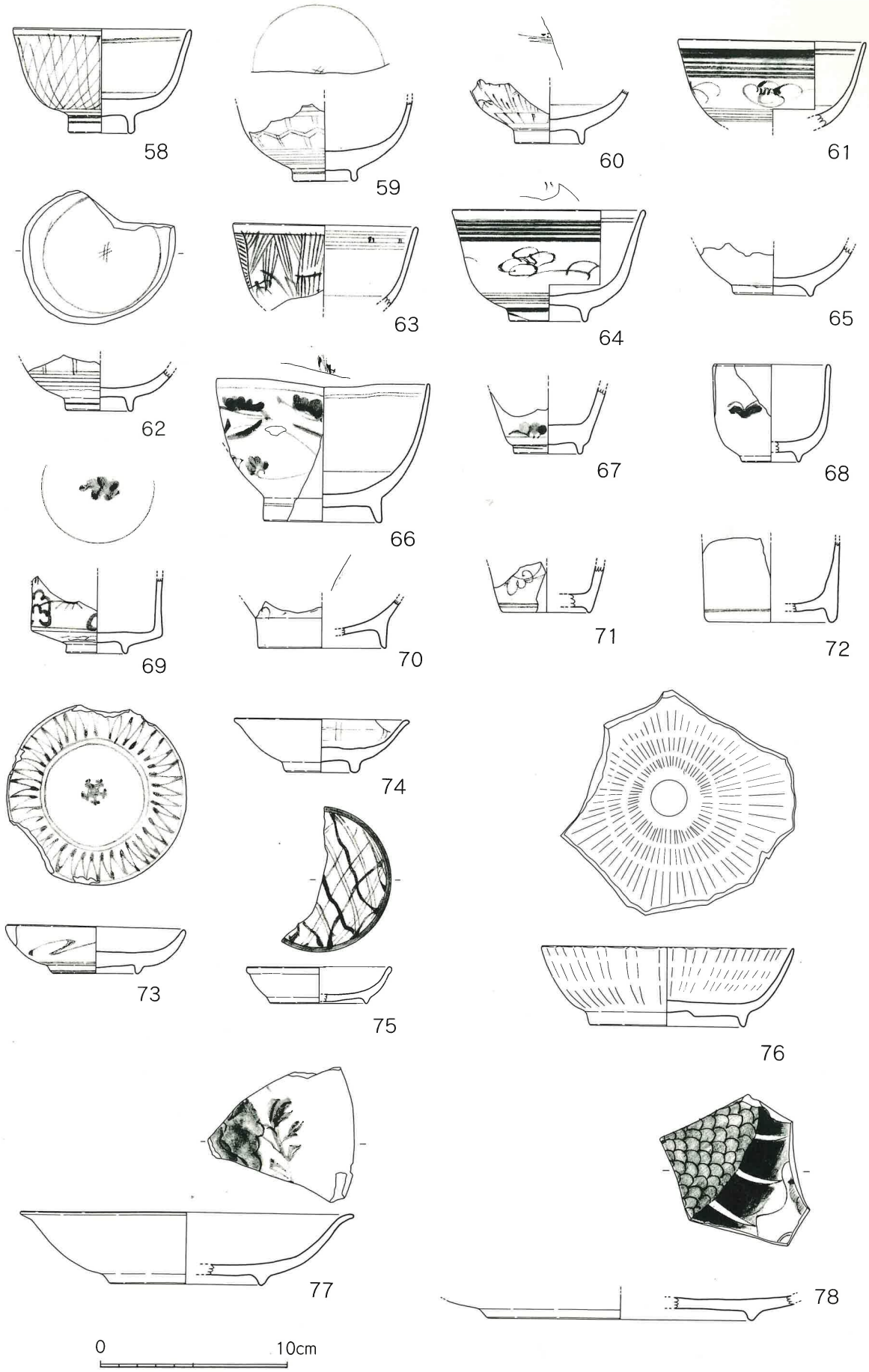
調査前には、調査区には民家が建っていたが、明治21年調製の字図（第19図）には旧道が延びていた。その道路側溝と考えられる溝が検出された。山側は石段を作り、道路は硬化していた。南側は一段の段落ちのみであり、道路南側には道路より一段低い水田か畑地が展開していたものであろう。

側溝からは第20図から27図の遺物が出土している。32から98は磁器。99から116は陶器。117から125は瓦質土器。126から143は土師質土器である。

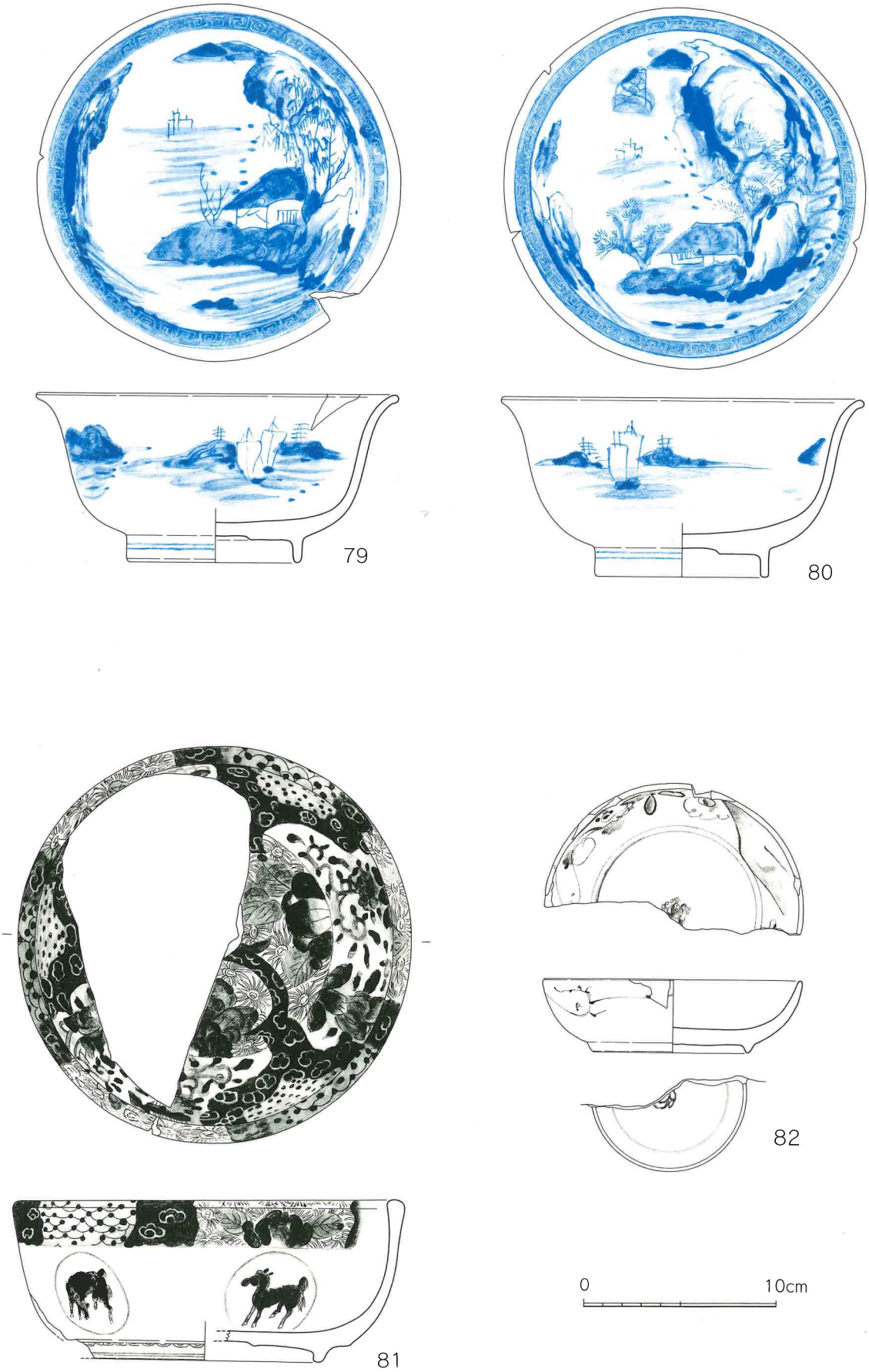
第19図　遺跡周辺旧字図（小字フチの部分）



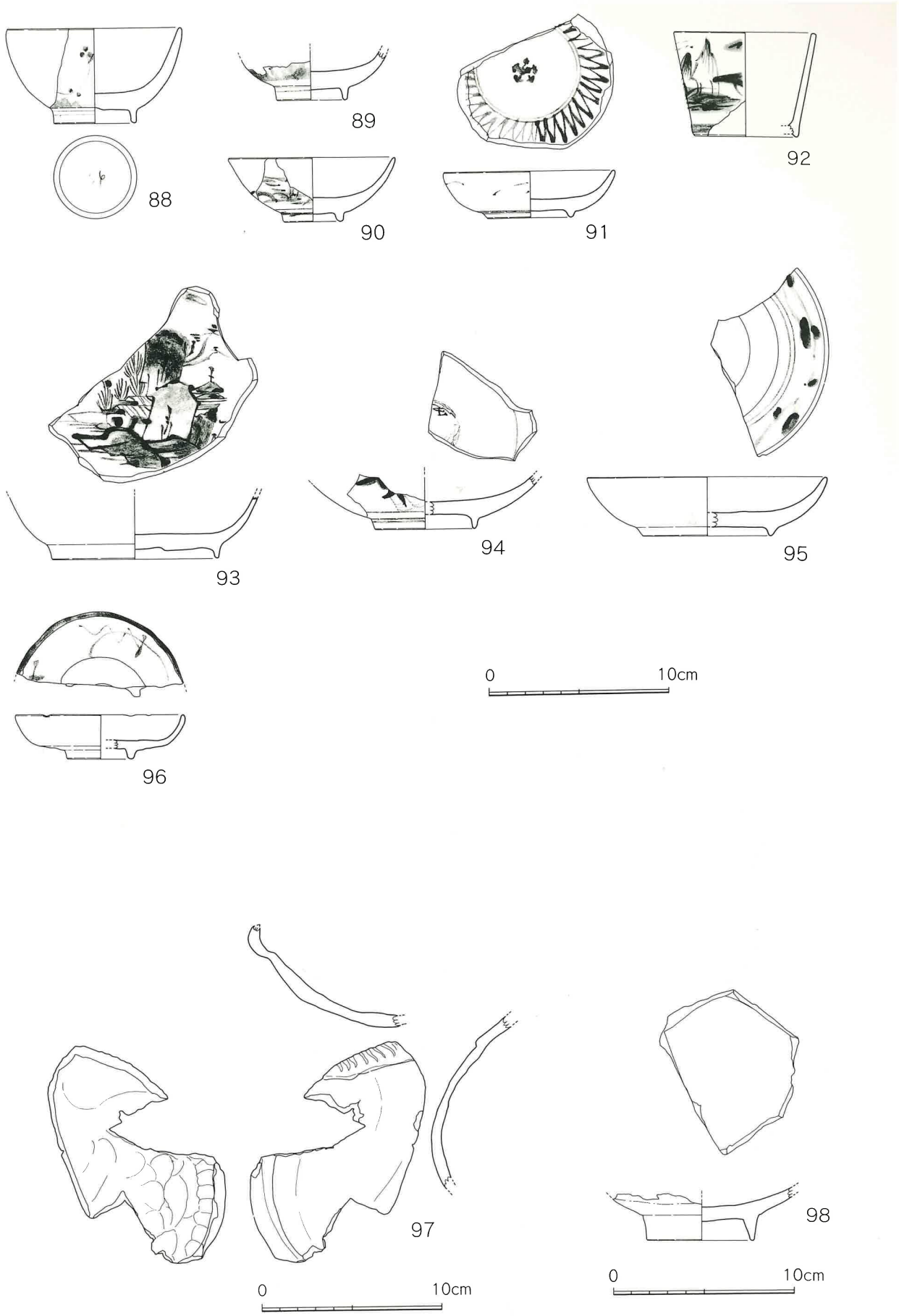
第20図　旧道路側溝出土遺物(1)



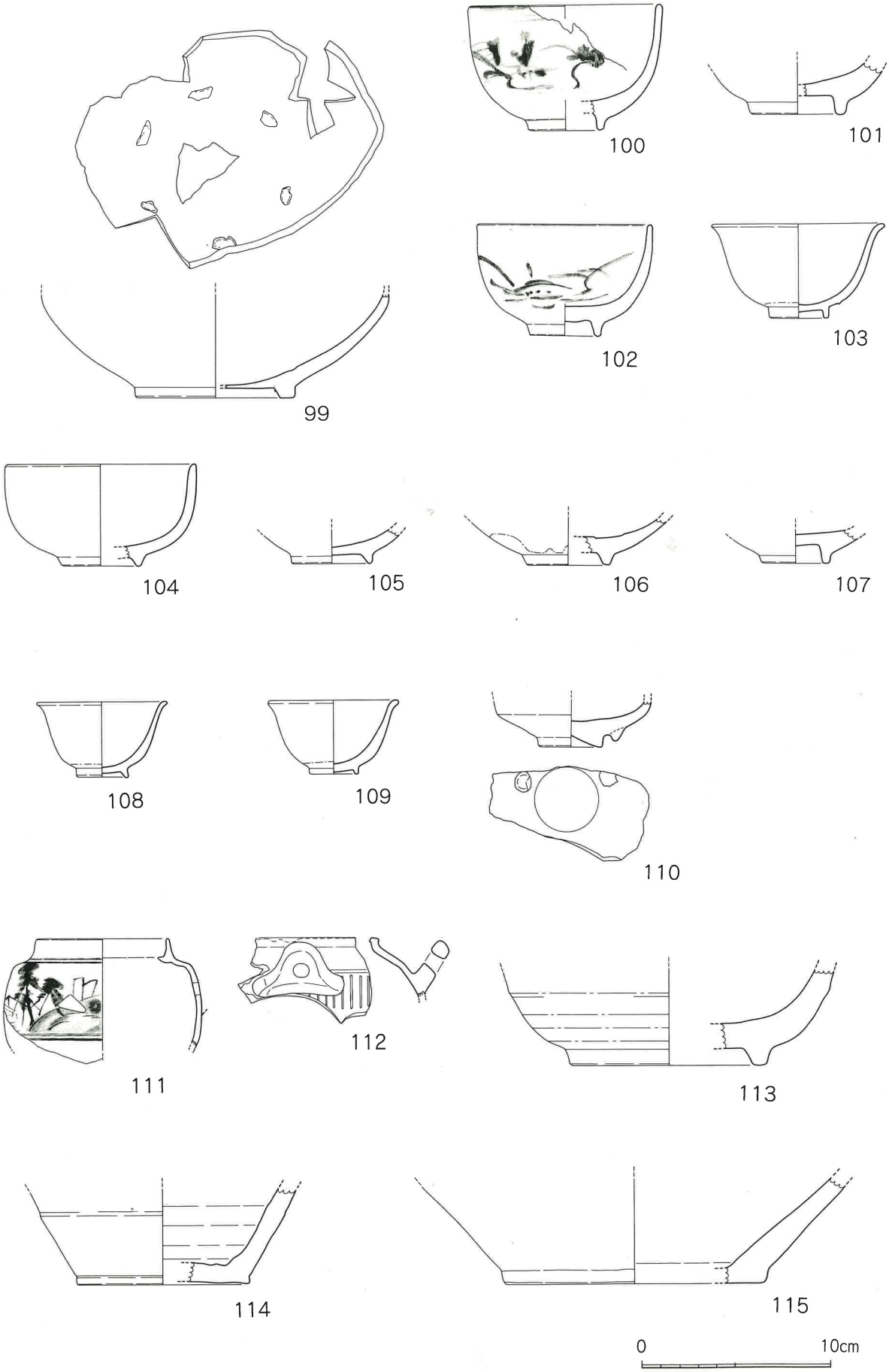
第21図　旧道路側溝出土遺物(2)



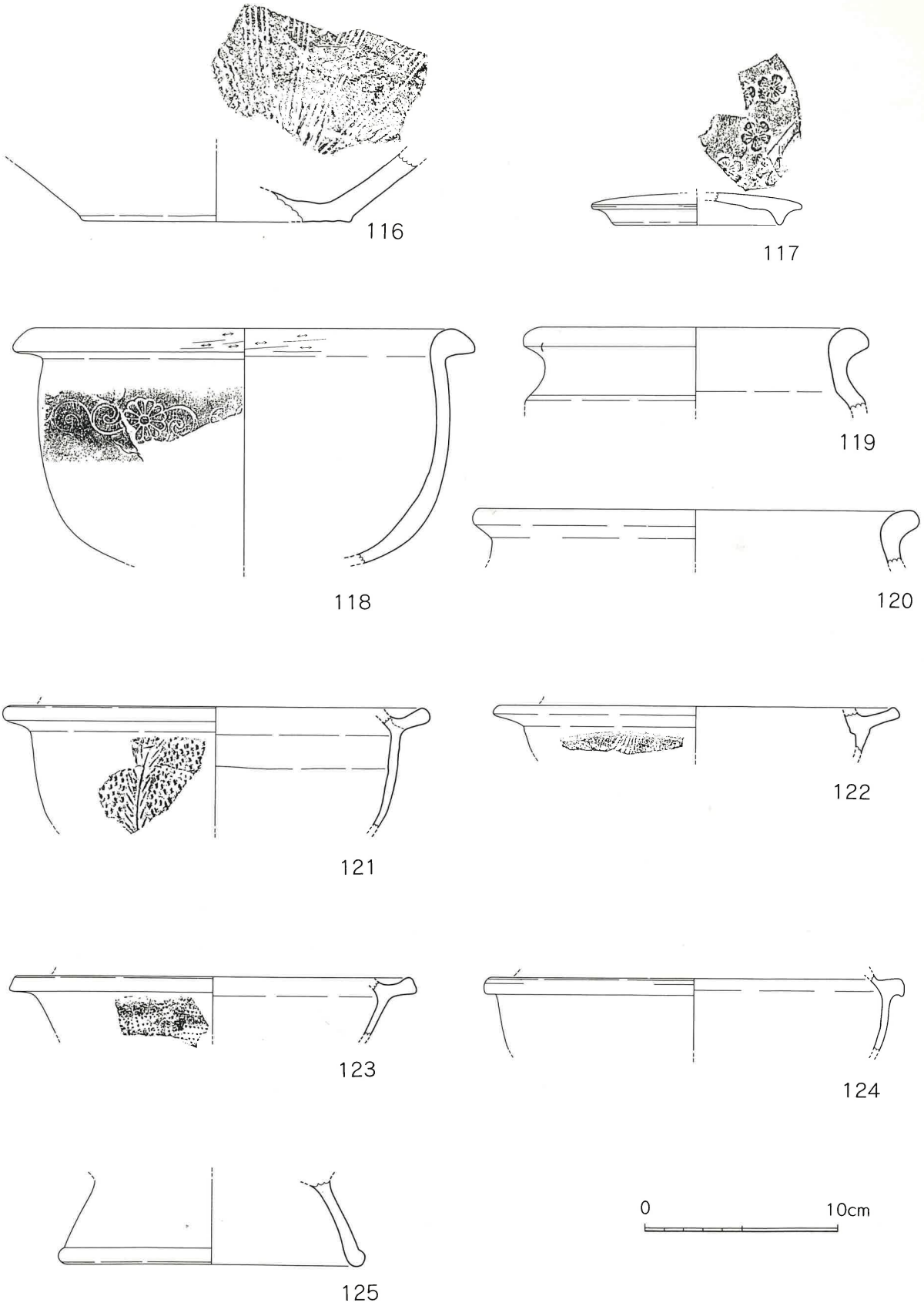
第22図　旧道路側溝出土遺物（3）



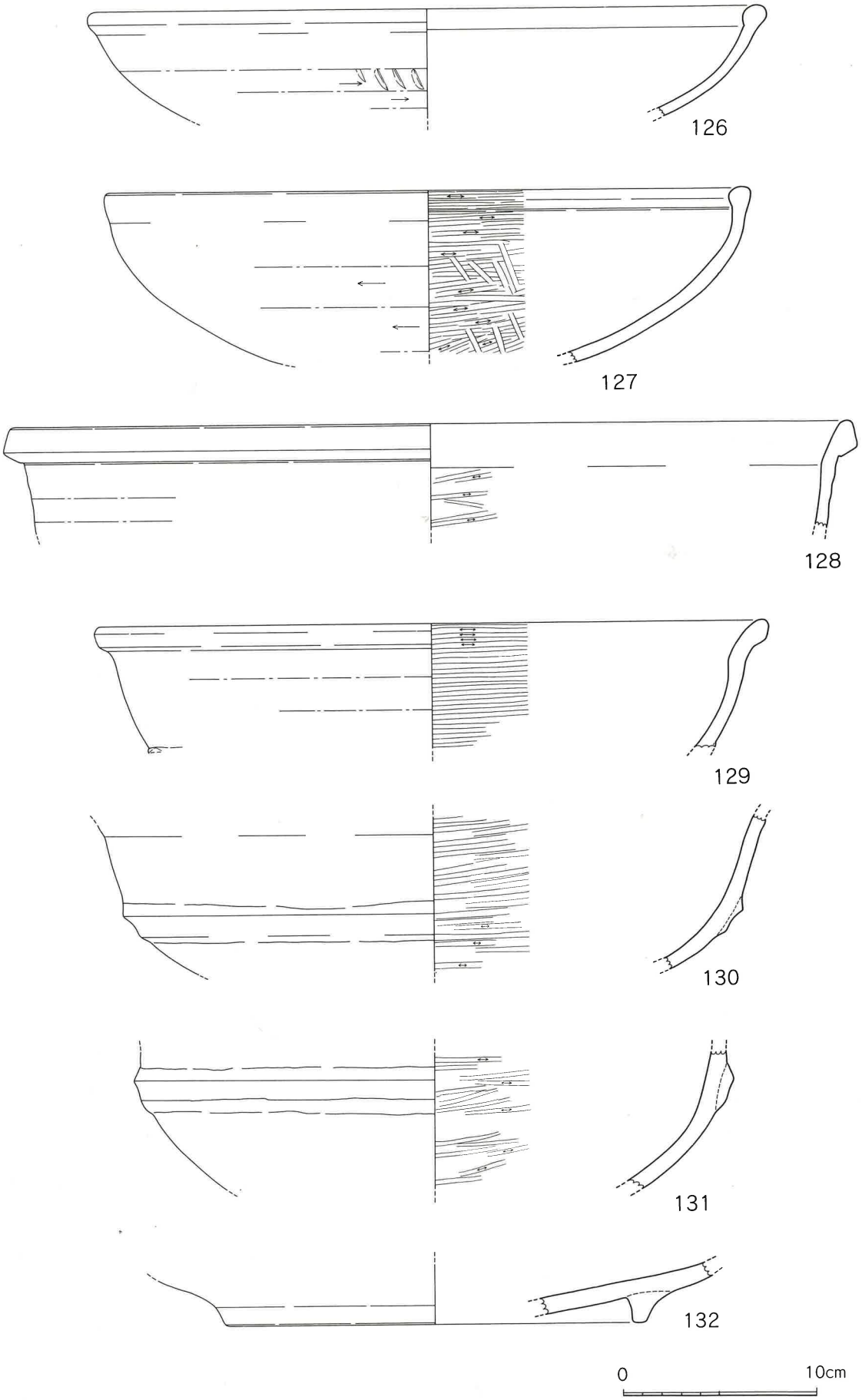
第23図　旧道路側溝出土遺物（4）



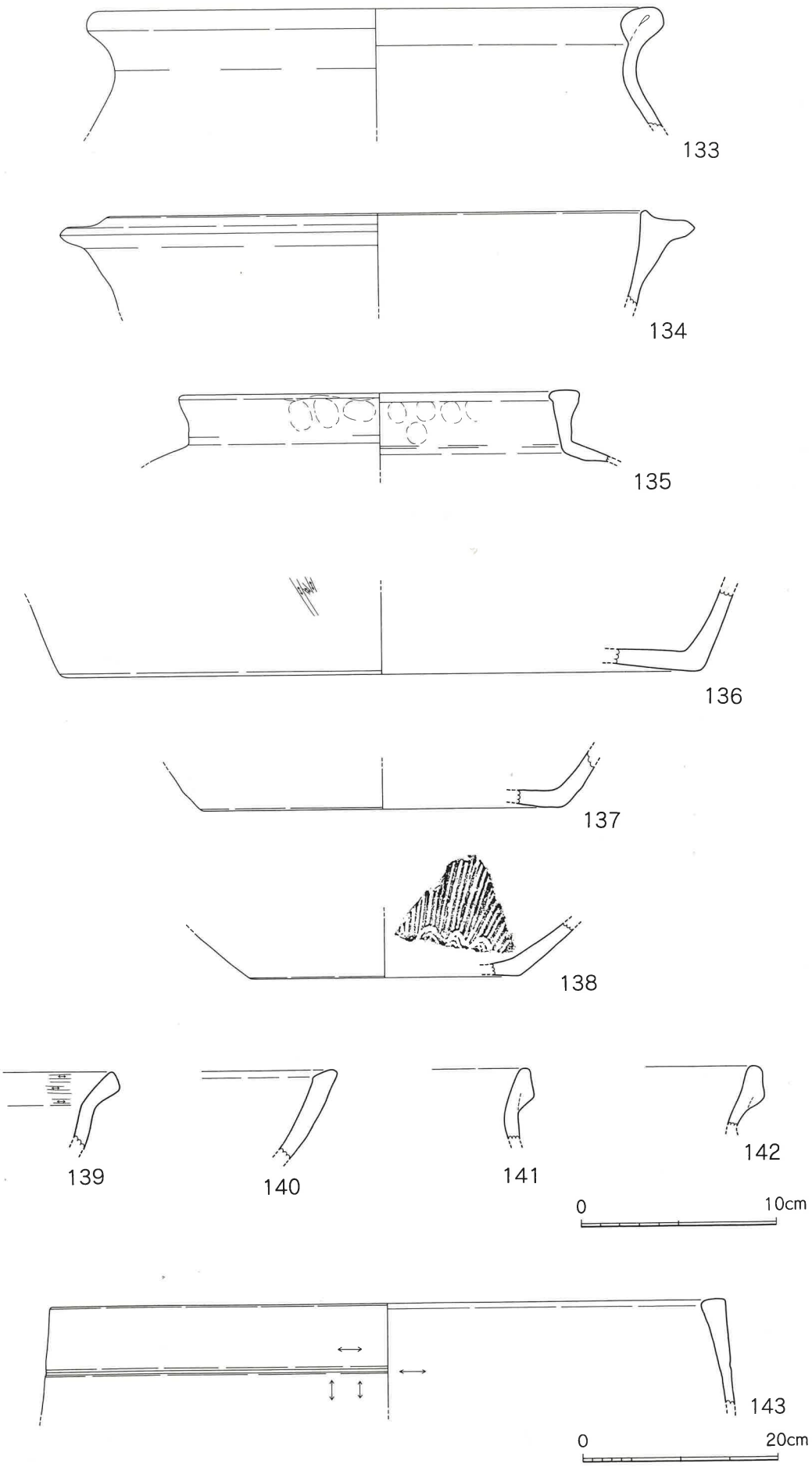
第24図　旧道路側溝出土遺物（5）



第25図　旧道路側溝出土遺物（6）



第26図　旧道路側溝出土遺物（7）



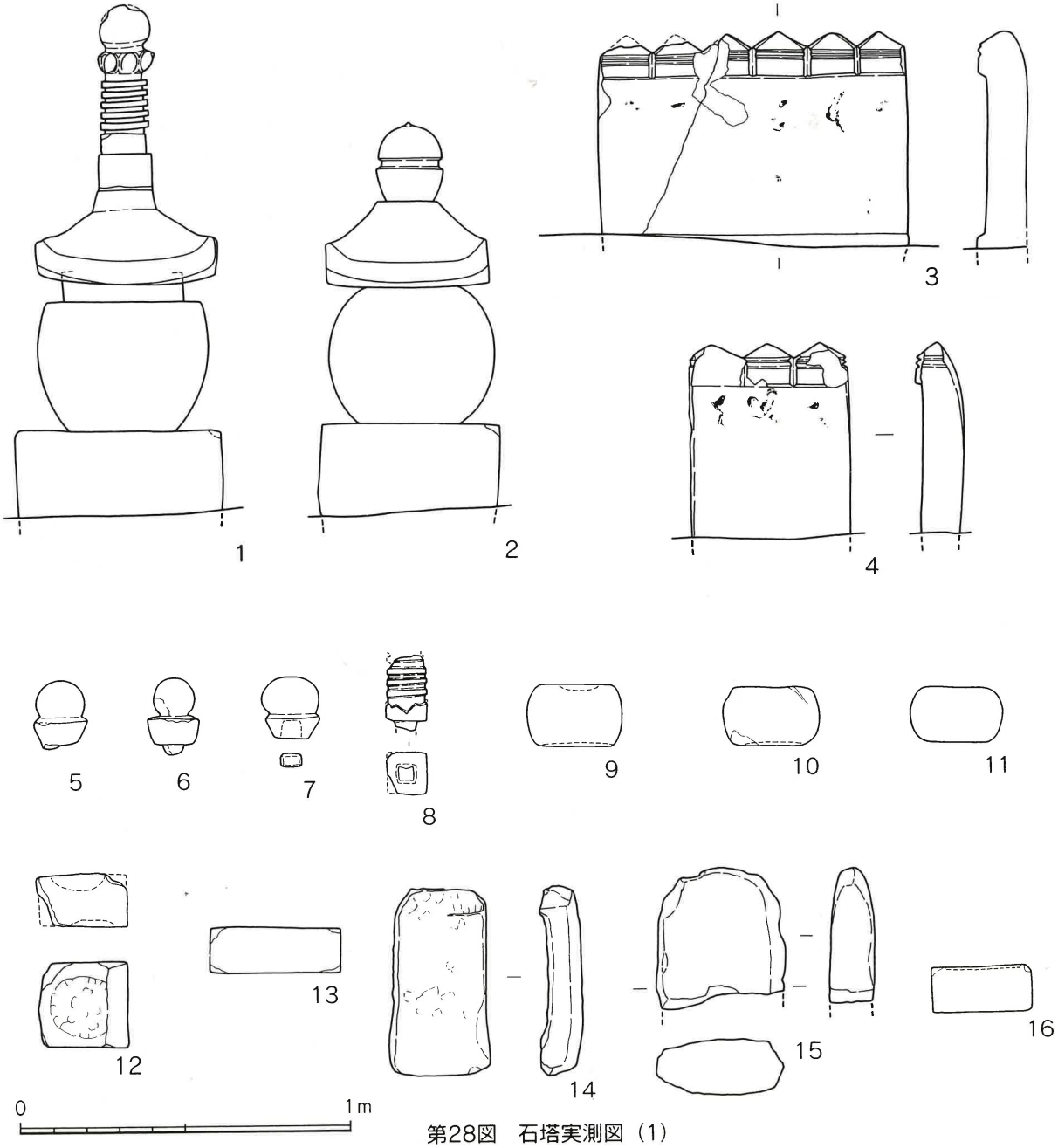
第27図　旧道路側溝出土遺物（8）

（8）石造物

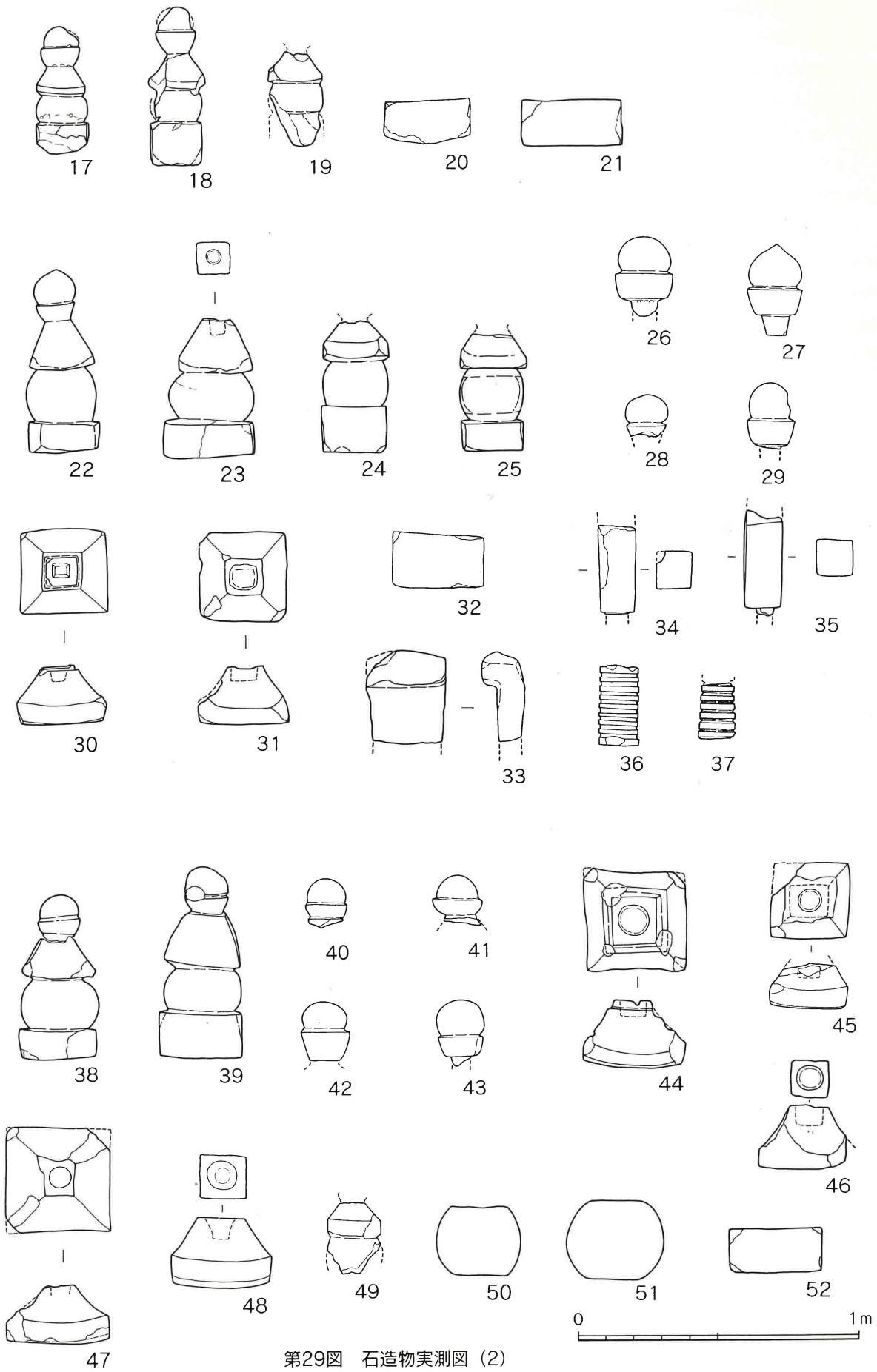
１から４は第１テラスにあったもので、調査前に所有者の手によって隣接地の寺の墓地横に降ろされて、すべて基礎がコンクリで固定されていた。１は宝塔で、全高1.5㍍の中型品である。全体のバランスに優れた優品である。しかし、相輪下部が欠損しており、本来あるはずの九輪が６本しか認められない。また、無文の露盤下部もセメントで継いでいる。宝珠下部の請花は単弁で浅い浮彫りになっており、笠部の隅は端部で強く反る。また、首部を持つ塔身は下位にいくほど引き締まる。銘、納入穴は認められない。年代的には鎌倉時代後半代から南北朝期が想定できる。

２は大型の五輪塔である。現在基礎（地輪）はコンクリで固定されており、全高は不明であるが、現在1.2㍍である。水輪の大きさに比べ、火輪以上が若干貧弱な印象を受けるが、すべて当初のものと考えられる。空風輪は全体に卵型を呈し、中央を溝で区切って空輪と風輪に分けている。火輪は照屋根で、隅部はシャープに反る。水輪はほぼ球形を呈する。時期的には１の宝塔と同時期であろう。

３、４は連碑である。３は６連の板碑で、それぞれに墨で梵字が書かれている。左側半分はひびが入り、一部



第28図　石塔実測図（1）



第29図　石造物実測図（2）

欠損しており風化が激しいため、墨書の残りもよくない。また、梵字の下部にも小さな字で墨書が認められるが、残念ながら読むことはできない。額部はシャープに突出しており、二条の切り込みもシャープである。切り込みは側面までは及んでいない。４は３連の板碑で、同じく表面にはそれぞれ墨書で梵字が認められる。梵字の下部にも小さな字で墨書が認められるが、読むことはできない。３に比べてややシャープさに欠けるが、額部切り込みは側面まで及ぶ。年代的には１、２と同様、いずれも鎌倉時代後半から南北朝期のものであろう。

1から4は第１テラスに残された基礎部のスタンプから、図９の様に配置されていたと想定できる。その他のスタンプは多くは五輪塔と考えられるが、降ろされた墓地に他の五輪塔と混在しており、特定ができなかった。

5から14は第１テラス出土品。5から7は空風輪。いずれも小型の五輪塔のもの。7は通常と異なり、ほぞ穴があいている。8は宝塔などの相輪部。請花部は下から見ると方形になっている。9から11は五輪塔の火輪。いずれも扁平なもの。12、13は基礎部。12は両面に浅い円形の凹みがある。14は板碑状の石造品。額部や基礎部の突出やわずかな反りなど、板碑の要素を備えており、表面はのみ痕が明瞭に残るなど未製品の可能性が高いが、板碑を模した石造品の可能性も残る。

15と16は、第１テラスの南側の平坦部から出土したものである。15は自然石を板碑状に加工しようとしたものか。ただし、額の表現はなく、単なる塔婆の可能性が高い。16は五輪塔地輪。

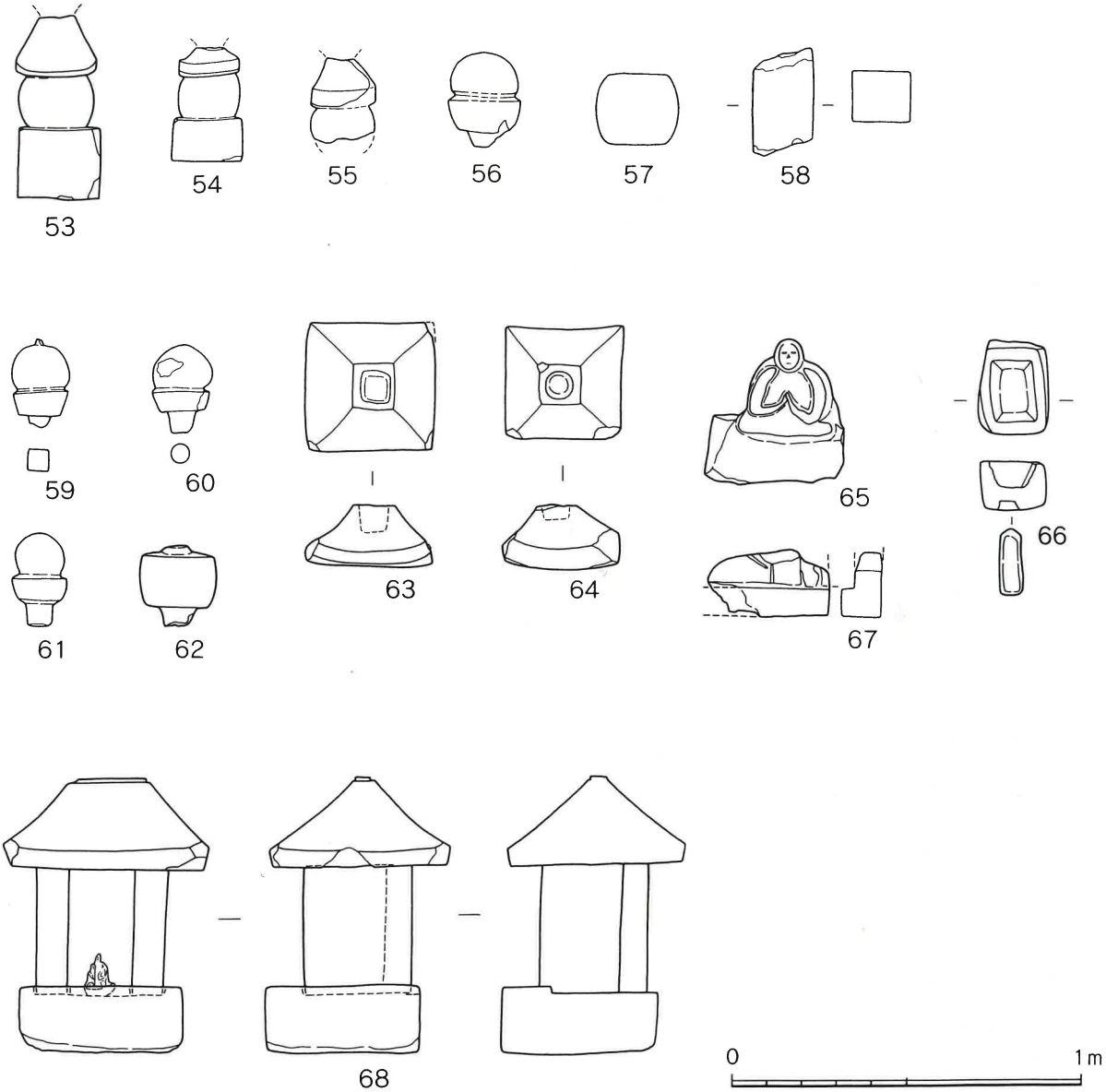
17から21は第７テラス出土品。調査の途中の表土剥ぎ段階で原位置を動いたものが多く、17と20のみが出土位置を特定できた。17は、完形で小型の一石五輪塔である。今回の調査で唯一下部に遺構を伴う位置で検出できた。火輪から地輪までの最大幅が同一であり、方柱状の石材を加工して作ったことがわかる。４面には種子が墨書されているが詳細は不明である。地輪最下部は荒割りのままである。18、19も17と同じく方柱状の石材を加工して作った一石五輪塔である。17に比べてやや全高が高い。20、21は地輪。

22から37は第５テラス出土品。22から25は一石五輪塔。ただし、23は空風輪のみ別材となる。22、23の火輪は直線的で、まったく反りが認められない。23は水輪が扁平で、全体的にゆがみがある。24、25はやや小型で、方柱状の石材を加工したものである。特に23は方柱状の石材の面を強く残してる。26から29は空風輪。26、27は大型の五輪塔になるかもしれない。30、31は五輪塔の火輪。30はわずかに露盤を作り出している。いずれもやや方形のほぞ穴を穿つ。32は地輪。33は板碑で、墨書の梵字が認められる。34、35はほぞを持つ方柱状の部品であるが、石造の塔の関係ではこのような部品は考えにくい。あるいは別な用途を持った石造物であった可能性もある。36、37は宝塔などの相輪。

38から52は第４テラス出土品。38から42と49は一石五輪塔。38、39の火輪は直線的で、ほとんど反りがない。44から48は五輪塔の火輪。いずれも空風輪を載せるほぞ穴がある。屋根にはやや反りが認められる。44は露盤を形づくる。46には梵字（ラー）の墨書が認められる。50、51は五輪塔の水輪。52は地輪。

53から58は第２テラス出土品。53から55は小型の一石五輪塔。56は空風輪、57は水輪である。58は方柱状を呈する石材。34、35と同様のものであり、用途は不明。

59から68は第８テラス出土品。59から62は五輪塔の空風輪。ただし、62は空輪部分の形状が不明。63、64は火輪。65から68は江戸時代の遺物。65は両手を胸の前で合わせる地蔵をレリーフ状に浮彫りにしたもの。台石と一体となる。首には布が巻かれており、現在まで信仰の対象になっていたことが窺える。66は天保６年の銘が入るが、用途は不明。片面には深さ６㌢の彫り込みが、片面には溝状の彫り込みがある。68は組み合わせ式の石祠。屋根は寄棟式となる。内部には素焼きの神像？が据えられていた。



第30図　石造物実測図（3）

第３章　まとめ

ここでは、遺物・遺構の評価を通して、城前遺跡の位置づけについて考えてみたい。

石造物

城前遺跡出土石造品の位置づけについて、付章で述べる周辺部の例などを参照しながら考えていきたい。まず、全体の年代的な位置づけである。石造品には紀年銘が無くそれ自身からは年代はわからない。一石五輪塔については、築造順序で後に位置づけられる可能性が高い上位にある第７テラスや第５テラスに小型のものが多いことから、この城前遺跡では、山腹にあるまず第１テラスが作られ、次いで山裾から上に向かってテラスが作られていったと考えられる。第１テラスと山裾部のテラスでは、時期的にも性格的にも差があった可能性が高い。

それは第１テラスにおいては明確な墓壙が検出されなかったことからもいえる。むしろ、墓に伴わない供養のための場であった可能性が高いのではなかろうか。

第２テラス以下は明確な墓壙があり、大部分墓に伴う供養塔である。

墓壙

調査区内では、計50基の墓壙が確認された。これらの墓壙は大きく分けて２形態ある。一つは長方形の大型のもので、仮にＡタイプとする。もう一つは小さな円形又は方形のものでＢタイプとする。あり方を見ると、Ａタイプがほぼ等間隔で二基１セットで分布し、その周辺にＢタイプが原則二基１セットで分布している。そして、Ａタイプはほぼ同一標高に築かれており、テラスの形成とは一見何の関係も無いように見えるのに対して、Ｂタイプはテラスに規制されながら存在している。これは、ＡタイプとＢタイプの違いがその性格の差から来るものではなく、時期的な差があることを示すものと考えられる。

それぞれ出土遺物が少なく、図示出来るのはＡタイプのもののみであるが、１５世紀と考えられる。出土石造物、特に五輪塔から導き出される年代観は、前節で述べたように第１テラスを除くと１５、１６世紀に納まると考えられることから、いずれにしてもこの年代幅でＡタイプとＢタイプが造られたと考えられる。その場合、やはりＡタイプが最初に造られ、後にＢタイプが造られたと考えるのが妥当であろう。つまり、第１テラスの位置づけは置いておくとして、最初に山裾にＡタイプの墓壙が造られ（その上に五輪塔などが建てられたものであろう）、その後テラス造成と共にＢタイプの墓壙が造られた（上に一石五輪塔を中心とした石塔が建てられたものであろう）と考えられるのである。

次に、ＡタイプとＢタイプの違いについてである。今述べたように、この両タイプは時期の違いを示していると考えられるが、それ以上に大きな形態の差は何を表しているのであろうか。Ａタイプは平均長軸長1.08㍍、短軸長0.54㍍であるが、土葬には不可能な大きさであろう。現在までに知られた県内の中世墓の一般的な長軸長は1.5㍍以上であることを考えても、城前遺跡の墓壙は、土葬とは考えられない。実際、出土した人骨からは火葬の痕跡も認められ、ＡタイプもＢタイプ同様、火葬骨を納骨した「納骨穴」と考えられる。

しかし、Ａタイプは火葬人骨を納めるだけにしては大きすぎる。その要因については不明とせざるを得ない。

次に、墓壙のあり方についてである。先に触れたように、ＡタイプもＢタイプも共に原則的に二基で１セットというあり方である。特に第７号と８号、第１０号と１１号、第１２号と１３号、第１４号と１５号 には大きく二基を囲む掘り込みが認められる。更に興味深いのは、それぞれの２基が共通点を持っているということである。つまり、形態や大きさなど、仮にどちらかが最初に作られ後にもう１基が掘られたとしたら、これほど類似するとは考えられない。当初から２基が計画的に作られたことを意味していると考えられる。つまり、どちらか一方の死を契機として、逆修墓として作られていた可能性が高いのである。

この遺跡では、明らかに墓ではない板碑（線刻板碑も含めて）もあり、継続的な年忌供養などの祭祀が行われていたことが推測されるが、そのひとつとして逆修の仏事も行われていたことが考えられる。

また、当初から予定されていた２者は、夫婦であると考えるのが妥当であろう。そう考えられるとすれば、中世人の死生観とともに、中世の家族のあり方の問題に迫ることのでできる事例とすることができる。

近世の高村焼

城前遺跡では、近世の道路状遺構の側溝から宇佐の高森焼（ホーロク焼）の製品が一定量出土している。高村焼は、現在の宇佐市高村において戦後まで焼かれ続けていた焼き物で、文献上の初見は鎌倉時代に遡る。中世の高村での土器生産については、文書史料以上のものは知られていないが、瓦質土器の生産については、特徴ある土器の分布から高村での生産の可能性が高いと思われる。

近世の土器については、宇佐を中心とした地域で遺跡の発掘調査で出土しており、筆者も「こねばち」の編年を行っているが、全体としての土器の変遷については未だ解明がなされていない。幸い、城前遺跡では各種の高村焼の製品が出土しているので、近世の高村焼を概観してみたい。

出土資料には、ホーロク（えごら）、コネ鉢、甕、スリ鉢、甕ゼイロがある。ホーロクは口縁端部を丸く内側に肥厚させ、内外面とも丁寧に磨かれている。最近まで使用されていた製品と基本的には変わりがない。

コネ鉢は、変遷がわかっている器種であり、それによると129の口縁部が肥厚せず小さく外反するタイプのものは１７世紀後半から１８世紀前半までにおさまるものである。128は大型のもので、甕の口縁部の可能性もあるが、口縁部が肥厚し、小さく折れる形状から１８世紀後半の年代が考えられる。胴部の130、131は幅広の突帯を巡らせるが、年代的にはしぼり込むことはできない。132は底部で、高台を付ける。

甕は最近まで使われていた製品にも様々な口縁部のバリエーションがあり、実際出土資料も様々である。133は口縁端部を内側に折り返し肥厚させるもの、134は口縁直下を鍔状に張り出させるもの、135は小さく直立する口縁部を作り出すものである。このようなバリエーションの存在は、モデルとなる甕のバリエーションの多さに起因するものであろう。

スリ鉢は、宇佐を中心とする地域において、１５世紀から１６世紀に底部内側に花弁状の摺り目を入れる瓦質のものが知られ、高村産であることが推測されるが、138は土師質のもので、同様の摺り目が認められる。城前遺跡では、他に１５世紀から１６世紀の資料の出土はなく、138も近世と考えられるが、特徴的な摺り目からやはり高村産であることが推測できる。ちなみに、民俗資料では高村産摺り鉢は知られていない。

甕ゼイロは、底部に焼成前の穿孔を持ち、米を蒸すのに使用されるが、民俗資料では口縁部の形状がコネ鉢と同様であり、口縁部の形状のみでは判別不能であるが、傾きによって判断できる。141と142は甕ゼイロの可能性が高い。

以上の出土資料の内、年代が押さえられるのはコネ鉢のみであり、１７世紀後半から１８世紀代のものである。共伴する陶磁器は主に１８世紀後半代からであり、高村焼の古相を呈するものもは１８世紀後半代を中心とするものであろう。

遺跡

城前遺跡は、山の斜面にテラスを作りそこに墓壙を穿ち墓所としたものと、平地部ではその山に向かって伸びる溝が検出された中世の遺跡である。時期的には、まず溝が埋まった後に山の中腹に宝塔や大型の五輪塔、板碑などが立てられる。ついで、山裾に墓地が造られる。この時期に前後して清台寺が創建されている。また、周辺にはさまざまな石造物が造られるが、いずれも本来は堂などの施設に伴うものであったものであろう。

まず、溝について考えてみたい。幅３㍍、深さ2㍍でほぼ直線的に伸びるが、調査区の制約からどのように伸びるかは不明である。現在の地割や明治２１年の旧字図にもその痕跡は認められないので想定復元は困難であるが、南側は調査区外に延びており、まっすぐ延びるとすると、調査区外であと３０㍍で真玉川によって形成された段丘の落ちに垂直にぶつかる。また一つの可能性としては、調査区外ですぐ西側に屈曲し、丘陵と一体となって、内部の何らかの施設を囲い込む機能を持ったものであったことも考えられる。

そして、その溝が埋まった後、比較的短期間の内に五輪塔や板碑などの石塔を伴う墓地が造られていくことになる。これは、清台寺の創建と関連を持つものであろう。清台寺が当初から臨済宗であったかは慎重であらねばならないが、もしそうであったなら六郷山との関係より、真玉荘を実質支配し、後に六郷山にも侵食していく武士勢力を想定することができる。そう考えられるとすると、この墓地は、武士層の菩提寺に伴うものか、または

何らかの結縁によって集合した集団墓地とすることができる。このいずれであるかは、今回の資料だけでは決し得ないことであり、さらに広範な調査が必要となるだろう。

付章　遺跡周辺の石造物

遺跡周辺には中世の石造物が点在する。その代表的なものをここで紹介し、遺跡の歴史的位置づけを考える資料としたい。

69と70は調査区隣接地の清台寺の門前、参道脇左右に立っている。69の宝篋印塔は向かって右、70の宝塔は向かって左側になる。69の宝篋印塔は、隅飾突起が大きいのが特徴で、宝珠の部分は欠損している。九輪は６本しか現存せず、上部が折れている可能性があるが、上部がコンクリで固められているので現状では確認できない。請花の蓮華座は単弁、反花は複弁、その下の露盤は格狭間ではなく蓮子が刻まれている。塔身には笠に接する部分に納入穴を穿つ。室町時代の作であろう。

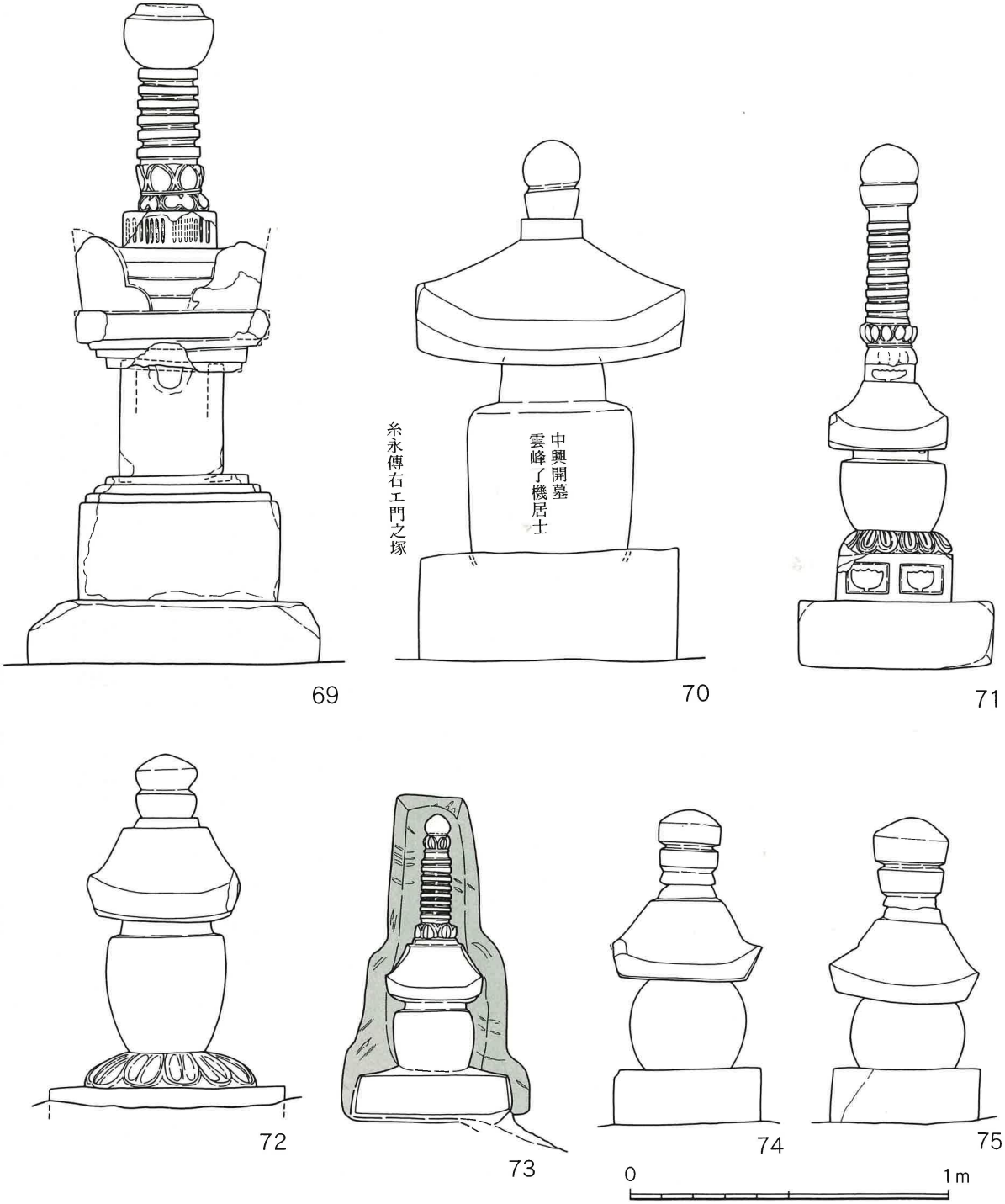
70は、国東半島では珍しい宝塔。通常大野川流域などの宝塔では上部が宝珠ではなく相輪が載るが、この例では宝珠が載っている。塔身、首部ともよく宝塔の形式を踏んでおり、平安時代末といわれる千燈寺宝塔と類似点があるが、宝珠の形状や笠の反りなどから、時代的には下るものであろう。塔身には「中興開基/雲峰了機居士」「糸永傳右ヱ門之塚」と刻まれているが、当初のものかは疑わしい。

71は城前遺跡の約0.5㌔下流に位置する「薬師堂」にある国東塔である。相輪が全体の２分の１を占めアンバランスな感じを受けるが、すべて当初からのものと考えられる。各部は完存している。最下位の基礎に載る格狭間を刻む基礎と台座は一体である。格狭間と複弁の反花はしっかりしている。首部には小さな納入納入孔が穿たれている。笠上部の露盤の格狭間は１カ所で、相輪上部の宝珠は無文である。南北朝期から室町時代前半の可能性が高い。

72は城前遺跡の対岸の山際にある堀内家墓地にある「異形国東塔」である。基礎と台座は一石である。台座の反花は複弁で比較的立体感のある彫りとなっている。やや縦長の塔身に首部が付き、反りのある笠が載る。その上部には、相輪ではなく、「異形」の根拠となる宝珠が載っている。異形国東塔の中では最末期（戦国末期）まで下るものではなく、室町時代で収まるものと考えられる。

73は堀内家墓地からやや山に入ったところにある「別十字堂」と呼ばれているところにある磨崖宝塔。数十年前に岩の土が剥がれ落ちて発見されたということで、ほとんど風化が進んでおらず、彫刻当時のシャープさを保っている。深いところで５㌢ほど彫り込んでおり、半肉彫りとなる。塔としてのバランスもよく古相を感じるが、銘などはない。薬師堂国東塔（71）よりは古く、鎌倉時代後半から南北朝期に収まるものであろう。

74と75は、城前遺跡調査区の道を挟んで向かい側にある墓地横に並べられている五輪塔である。城前遺跡出土五輪塔とは空風輪の形状が明確に異なるので、図化した。宝珠は丸みを帯びず、円柱状のものに刻みを入れて空輪と風輪に分けている形状で、天正６年の銘を持つ例に類似する。



第31図　遺跡周辺の石造物

第２表　出土土器観察表

No.	器　種	法　量（cm）			胎　土	成形	調　整		焼成	色調	備　考
		口径	器高	底経			内　面	外　面			
1	土師器小皿	(復元) 8.6	0.8	(復元) 7.2	砂粒少ない 角閃石(少)長石(多) 赤色粒子(多)	ロクロ	ナデ、 回転ヨコナデ	回転ヨコナデ、 回転糸切り	良好	橙褐色	1/6片
2	土師器小皿	(復元) 8.2	0.9	(復元) 7.0	砂粒多い 長石(多)赤色粒子(多)	ロクロ	ナデ、 回転ヨコナデ	回転ヨコナデ、 回転糸切り	良好	淡茶褐色	1/3片
3	土師器小皿	7.6	0.8	6.2	砂粒少ない 角閃石(多)長石(多) 赤色粒子(多)	ロクロ	ナデ、 回転ヨコナデ	回転ヨコナデ、 回転糸切り後板状圧痕	良好	淡茶褐色	底部外面にスス付着
4	土師器小皿	(復元) 8.0	1.4	(復元) 5.8	砂粒少ない 長石(多)赤色粒子(少)	ロクロ	ナデ、 回転ヨコナデ	回転ヨコナデ、 回転糸切り	良好	茶褐色	1/2片
5	土師器小皿	(復元) 7.2	1.1	(復元) 6.2	砂粒少ない 長石(少)赤色粒子(少)	ロクロ	ナデ、 回転ヨコナデ	回転ヨコナデ、 回転糸切り	良好	淡褐色	1/4片
6	土師器ロウソク立て	(復元) 6.9	0.8	(復元) 5.5	砂粒多い 角閃石(少)長石(少) 赤色粒子(多量)白色粒子(多)	ロクロ	ナデ、 回転ヨコナデ	回転ヨコナデ、 回転糸切り	良好	淡茶褐色	
7	土師器坏	(復元) 13.5	2.0	(復元) 9.6	砂粒少ない 角閃石(多)長石(多) 赤色粒子(多)	ロクロ	ナデ、 回転ヨコナデ	回転ヨコナデ、 不明	良好	淡茶褐色	1/4片
8	土師器坏	(復元) 12.8	2.2	(復元) 9.2	砂粒多い 角閃石(少)長石(多) 赤色粒子(多)	ロクロ	ナデ、 回転ヨコナデ	回転ヨコナデ、 不明	良好	橙褐色	1/5片 口縁内面にスス付着
9	土師器坏	(復元) 13.7	2.0	(復元) 8.7	砂粒少ない 角閃石(少)長石(多) 赤色粒子(多)	ロクロ	ナデ、 回転ヨコナデ	回転ヨコナデ、 回転糸切り	良好	淡褐色	1/4片
10	土師器坏	(復元) 12.0	2.4	(復元) 8.2	砂粒少ない 角閃石(多)長石(多)	ロクロ	ナデ、 回転ヨコナデ	回転ヨコナデ、 回転糸切り	良好	白橙褐色	1/5片
11	土師器坏		1.4	(復元) 9.0	砂粒少ない 角閃石(多)長石(多) 赤色粒子(少)	ロクロ	ナデ、 回転ヨコナデ	回転ヨコナデ、 回転糸切り	良好	白黄褐色	1/2片
12	土師器坏			(復元) 9.4	砂粒少ない 角閃石(多)長石(多) 赤色粒子(多)	ロクロ	ナデ、 回転ヨコナデ	回転ヨコナデ、 回転糸切り後静止糸切り	良好	橙褐色	1/4片
13	土師器坏			(復元) 7.6	砂粒少ない 角閃石(多)長石(多)	ロクロ	ナデ、 回転ヨコナデ	回転ヨコナデ、 回転糸切り	良好	淡褐色	1/3片
14	土師器坏			(復元) 9.0	砂粒少ない 長石(少)	ロクロ	ナデ、 回転ヨコナデ	回転ヨコナデ、 板状圧痕	良好	淡褐色	1/5片
15	土師器坏			(復元) 9.8	砂粒少ない 角閃石(多)長石(多) 赤色粒子(多)	ロクロ	ナデ、 回転ヨコナデ	回転ヨコナデ、 板状圧痕？	良好	淡茶褐色	1/4片
16	土師器坏			(復元) 9.0	砂粒少ない 角閃石(少)長石(多)	ロクロ	ナデ、 回転ヨコナデ	回転ヨコナデ、 回転糸切り	普通	淡褐色	1/2片
17	瓦器質土器坏		1.8	(復元) 7.6	精致 角閃石(少)長石(少)	ロクロ	回転ヨコナデ 回転ヨコナデ	回転ヨコナデ後 ヘラミガキ回転糸切り	良好	灰褐色	1/4片
18	瓦器高台付碗	17.0	6.5	5.5	砂粒少ない 角閃石(多)長石(多) 赤色粒子(多)		ナデ、 ヨコナデ	指圧痕、ナデ、	良好	黒褐色 (口縁上部白灰褐色)	
19	瓦器高台付碗	(復元) 15.2	5.0	6.0	砂粒少ない 角閃石(多)長石(多)		指ナデ、 ヨコナデ	指圧痕、ナデ、 ヨコナデ	良好	暗灰褐色	1/2片
20	瓦器碗	(復元) 12.4			砂粒少ない 角閃石(多)長石(多) 灰色粒子(少)		ナデ、 ヨコナデ	ナデ、 ヨコナデ	普通	灰色	
21	瓦質土器 高台付碗			(復元) 4.6	精致 角閃石(多)長石(多)		ナデ後ヘラミガキ	ナデ	良好	灰褐色	
22	土師器土鍋	(復元) 31.6			砂粒多い 長石(多)白色粒子(多)		ヨコハケ、 ヨコナデ	指圧痕、ナデ、 ヨコナデ	良好	灰白黄褐色	1/6片
23	土師質土器土鍋	31.4		(復元) 4.6	砂粒少ない 長石(多)		ヨコハケ、ヨコナデ	指圧痕、ヨコナデ、 ナナメハケ→ナデ	良好	淡褐色	口縁外面にスス付着
24	土師器(？)	(復元) 20.4			砂粒少ない 角閃石(多)長石(多)		ナデ ヨコナデ	ナデ、 ヨコナデ	良好	淡褐色	外面にスス付着
25	土師器土鍋(?)	(復元) 25.8			砂粒多い 石英(多)		ヨコハケ、 ヨコナデ	指圧痕、ナデ、 ヨコナデ	良好	白黄褐色	1/8片
26	土師器土鍋	(復元) 15.2			砂粒少ない 長石(少)石英(少)		ヨコハケ、 ヨコナデ	指圧痕、ナデ、 ヨコナデ	良好	白灰褐色	1/6片
27	瓦質土器？口縁	(復元) 28.5			精致 長石(少)		ヨコハケ、 ヨコナデ	指圧痕、ナデ	良好	白灰褐色	
28	土師器小皿	(復元) 6.8	1.0	(復元) 5.6	砂粒少ない 長石(少)赤色粒子(少)	ロクロ	ナデ、 回転ヨコナデ	回転ヨコナデ、 糸切り離し	良好	淡茶褐色	1/3片
29	土師器小皿	(復元) 7.6	1.5	(復元) 7.0	砂粒少ない 長石(少)赤色粒子(少)	ロクロ	ナデ、 回転ヨコナデ	回転ヨコナデ、 糸切り離し	良好	淡茶褐色	1/3片
30	土師器杯			(復元) 7.2	砂粒少ない 長石(少)	ロクロ	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ、 回転糸切り	良好	茶褐色	1/4片

No.	器　種	法　量（cm）			胎　土	成形	調　整		焼成	色調	備　考
		口径	器高	底経			内　面	外　面			
31	土師器坏			(復元) 9.0	砂粒少ない 角閃石(少)長石(多)	ロクロ	ナデ、 回転ヨコナデ	回転ヨコナデ、 回転糸切り	良好	淡茶褐色	1/5片
113	陶器鉢			(復元) 10.4	精致	ロクロ	ナデ	回転ヘラケズリ、 ヨコナデ	良好	赤茶褐色	
114	陶器底部			(復元) 9.2	精致	ロクロ	ロクロ目	回転ヨコナデ	良好	灰色	
115	瓦質土器 カメ底部			(復元) 13.8	砂粒少ない 長石(多)石英(多量)	ロクロ	ナデ	ナデ	良好	暗灰色	
116	瓦質擂鉢底部	(復元) 14.0			砂粒多い 長石(少)石英(多)		スリ目	ナデ	普通	白黄褐色	
117	瓦質土器フタ	(復元) 8.8			精致 角閃石(少)長石(多)	ロクロ	ナデ、 回転ヨコナデ	花(スタンプ)	良好	暗灰色	
118	瓦器火鉢口縁	(復元) 24.0			精致 長石(多)		ナデ、ヨコナデ →ヘラミガキ	ナデ、ヨコナデ→ ヘラミガキ→施文	良好	暗灰色	1/2片
119	瓦器火鉢口縁	(復元) 16.6	2.0		精致		ヨコナデ	ヨコナデ→ ヘラミガキ	良好	暗灰色	1/6片
120	瓦器？口縁	(復元) 22.8			精致 角閃石(少)長石(少)	ロクロ	回転ヨコナデ →ヘラミガキ	回転ヨコナデ →ヘラミガキ	良好	暗灰色	1/4片
121	瓦器火鉢口縁	(復元) 22.0			精致 石英(少)	ロクロ	ナデ、 回転ヨコナデ	ナデ、 回転ヨコナデ→施文	良好	灰色	外面にスス付着
122	瓦器火鉢口縁	(復元) 21.0			精致	ロクロ	回転ヨコナデ	ヨコナデ→ 施文	良好	灰色	内外共スス付着
123	瓦器火鉢口縁	(復元) 20.8			精致 長石(少)	ロクロ	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ ヘラミガキ	良好	灰色	外面にスス付着
124	瓦器土器？口縁	(復元) 21.4			精致 長石(多)	ロクロ	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	良好	灰色	1/5片
125	瓦器火鉢脚			(復元) 15.6	精致	ロクロ	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	良好	灰色	1/2片
126	高村焼ホーロク	(復元) 35.0			精致 長石(多)		ナデ、 ヨコナデ	ヘラケズリ、 ヨコナデ	良好	淡茶褐色	1/5片外面スス付着
127	高村焼ホーロク	(復元) 33.5			精致 角閃石(少)長石(多) 赤色粒子(多)		ナデ ヨコナデ後ヘラミガキ	ヘラケズリ、 ヨコナデ	良好	(内)淡茶褐色 (外)暗褐色	1/5片
128	高村焼コネ鉢 口縁	(復元) 44.0			精致 角閃石(少)長石(多) 赤色粒子(多)	ロクロ	回転ヨコナデ 後ヘラミガキ	ヘラケズリ、 回転ヨコナデ	良好	暗褐色	口縁に丹塗り
129	高村焼コネ鉢	(復元) 34.8			砂粒少ない 角閃石(少)長石(少) 赤色粒子(多)		ヘラミガキ	ヘラケズリ ヨコナデ	良好	淡茶褐色	口縁内面3cm丹塗り
130	高村焼コネ鉢 胴部				精致 長石(多)赤色粒子(少)		ナデ ヘラミガキ	ナデ	良好	橙褐色	胴最大径(復元) 32.3cm
131	高村焼コネ鉢 胴部				精致 長石(多)赤色粒子(少)		ナデ→ ヘラミガキ	ヘラケズリ、 ヨコナデ	良好	橙褐色	胴最大径(復元) 31.2cm
132	高村焼コネ鉢 底部			(復元) 22.0	砂粒少ない 角閃石(少)長石(多) 赤色粒子(少)	ロクロ	ヘラミガキ	ヨコナデ	良好	橙褐色	
133	高村焼カメ口縁	(復元) 28.8			精致　角閃石(少) 赤、白色粒子(多)	ロクロ	回転ヨコナデ →ヘラミガキ	回転ヨコナデ →ヘラミガキ	良好	淡茶褐色	1/2片
134	土師質カメ口縁	(復元) 32.5			砂粒多い 角閃石(多)長石(多量) 石英(少)		ヨコナデ	ヨコナデ	良好	淡茶褐色	外面にスス付着
135	高村焼カメ口縁	(復元) 20.4			砂粒少ない 角閃石(少)長石(多)		ヘラケズリ、 ヨコナデ	ヘラケズリ、 ヨコナデ	良好	淡褐色	1/2片
136	高村焼カメ底部	(復元) 32.6			砂粒少ない 長石(少)		ナデ	ヘラケズリ後 ヘラミガキ　ヘラ調整	良好	橙褐色	
137	土師質？底部	(復元) 18.6			砂粒少ない 長石(多)赤色粒子(多)		ナデ	ナデ、 ヨコナデ	良好	暗褐色	
138	土師質擂鉢底部			(復元) 14.0	砂粒少ない 長石(多)		スリ目、(底部 は花文状)	ナデ	良好	淡茶褐色	
139	ホーロク口縁				砂粒多い 長石(多)		ヨコナデ→ ヘラミガキ	ヨコナデ	良好	暗褐色	内面に赤色顔料 付着か？
140	ホーロク口縁				砂粒少ない 角閃石(多)長石(多量) 赤色粒子(多)		ナデ、 ヨコナデ	ヘラケズリ、 ヨコナデ	良好	淡茶褐色	外面にスス付着
141	高村焼コネ鉢 口縁				精致 角閃石(少)長石(多)		ヨコナデ	ヨコナデ	良好	淡茶褐色	内面丹塗り

No.	器　種	法　量（cm）			胎　土	成形	調　整		焼成	色調	備　考
		口径	器高	底経			内　面	外　面			
142	高村焼コネ鉢口縁				精致 角閃石(少)長石(多)		ヨコナデ	ヨコナデ	良好	淡茶褐色	内面丹塗り
143	カメ口縁	(復元) 69.2			砂粒多い 長石(少)石英(多量)白色粒子(多量) 赤色粒子(少)、金雲母(含)		ナデ→部分的にヘラミガキ(口縁上部は剥離)	ナデ後部分的にタテ、ヨコのヘラミガキ	良好	橙褐色	

第３表　出土陶磁器観察表

No.	器　種	法　量（cm）			成形	装　　飾			底面内底	製作地	製作年代	備　考
		口径	器高	底経		絵付・釉薬	文　様	装飾特徴				
32	磁器皿			6.60	ロクロ	青磁	不明	スタンプ		中国	14～15C	Ｖ類
33	陶器碗	7.40	5.50	3.20	ロクロ	透明				信楽	18C後~19C	
34	磁器碗			4.60	ロクロ	染付・透明				肥前系	１８Ｃ後	見込蛇ノ目釉剥ぎ
35	磁器碗			4.70(反)	ロクロ	染付・透明				肥前	１８Ｃ後	見込蛇ノ目釉剥ぎ
36	磁器碗	10.00	5.10	4.20	ロクロ	染付・透明	二重網目			肥前	18C後半	くらわんか
37	磁器碗	10.00	5.10	4.00	ロクロ	染付・透明	二重網目			肥前	１８Ｃ後	くらわんか
38	磁器碗	9.60	5.20	3.40	ロクロ	染付・透明	二重網目			肥前	１８Ｃ後	くらわんか
39	磁器碗	10.20	5.25	4.00	ロクロ	染付・透明	二重網目			肥前	１８Ｃ後	くらわんか ゆがみアリ
40	磁器碗			3.60(反)	ロクロ	染付・透明	梅樹・雪輪		大明年製 くずれ銘	肥前	１８Ｃ後	くらわんか
41	磁器碗			4.20(反)	ロクロ	染付・透明	見込：山水？			肥前	１８Ｃ後	くらわんか
42	磁器碗	11.20	5.20	4.00	ロクロ	染付・透明	丸文			肥前	１８Ｃ後	くらわんか 見込み蛇ノ目釉剥ぎ
43	磁器碗			4.80	ロクロ	染付・透明	見込:五弁花 外:丸文	コンニャク 印判？		肥前	１８Ｃ後	くらわんか
44	磁器碗			3.80	ロクロ	染付・透明	草花			肥前	１８Ｃ代	
45	磁器碗	9.90	4.70	3.90	ロクロ	染付・透明	梅樹			肥前	１８Ｃ後	くらわんか
46	磁器碗			3.80	ロクロ	染付・透明	梅樹・雪輪			肥前	１８Ｃ後	くらわんか
47	磁器碗			4.10	ロクロ	染付・透明	梅樹・雪輪		点あり	肥前	１８Ｃ後	くらわんか
48	磁器碗			4.00	ロクロ	染付・透明	梅樹・雪輪		大明年製 くずれ銘	肥前	１８Ｃ後	焼成不良・くらわんか
49	磁器碗			3.80	ロクロ	染付・透明			大明年製 くずれ銘	肥前	１８Ｃ後	くらわんか
50	磁器碗	8.20(反)	5.35	3.20(反)	ロクロ	染付・透明	見込:花十字？輪？ 外:丸文			肥前	１８Ｃ後	丸形湯呑茶碗
51	磁器碗			4.80	ロクロ	染付・透明	見込：五弁花	コンニャク 印判		肥前	１８Ｃ後	
52	磁器碗			3.80	ロクロ	染付 内:透明 外:青磁	見込：五弁花	コンニャク 印判	二重方形枠 の渦福	肥前	１８Ｃ後	
53	磁器碗			4.80	ロクロ	染付・透明	見込:五弁花・二重圏線 外:植物	コンニャク 印判	銘(変形字) 圃？	肥前	１８Ｃ後	
54	磁器碗	7.90	6.00	4.20	ロクロ	染付・透明	見込:五弁花 外:矢羽根　内:四方襷		くずれた 渦福	肥前	１９Ｃ後	筒形碗
55	磁器碗			3.80	ロクロ	染付・透明	見込：花？植物？			肥前系	１８Ｃ後	
56	磁器碗			5.00	ロクロ	染付・透明	見込:五弁花 外:丸文	コンニャク 印判		肥前系	１８Ｃ代	見込蛇ノ目釉剥ぎ
57	磁器碗	8.20(反)	4.40	3.40(反)	ロクロ	染付・透明	見込:花 外:寿・こうもり			肥前	18C後~末	小広東碗
58	磁器碗	9.60	5.60	3.60	ロクロ	染付・透明	外:網目文 斜格子 見込:井桁？			肥前	1820～ 1860年代	
59	磁器碗			3.40(反)	ロクロ	染付・透明	外:亀甲 見込:井桁？			肥前	1820～ 1860年代	端反碗？二次的比熱
60	磁器碗			3.60	ロクロ	染付・透明	見込:水？ 外:笹			肥前	1820～ 1860年代	端反碗
61	磁器碗	10.20			ロクロ	染付・透明	花			肥前	1820～ 1860年代	

No.	器　種	法　量（cm）			成形	装　　飾			底面内底	製作地	製作年代	備　考
		口径	器高	底経		絵付・釉薬	文　様	装飾特徴				
62	磁器碗			3.60	ロクロ	染付・透明	見込：井桁			肥前	1820～1860年代	端反碗
63	陶器碗	10.00			ロクロ	染付・透明	外：笹			肥前	1820～1860年代	端反碗
64	磁器碗	10.40	6.00	4.00	ロクロ	染付・透明	見込:不明 外:花			肥前	1820～1860年代	
65	磁器碗			4.10(反)	ロクロ	染付・透明				肥前	18C後~19C	焼成不良
66	磁器碗		7.45	6.40	ロクロ	染付・透明	見込:くずれた寿 外:草花			肥前	1780～1810年代	広東碗 ゆがみあり
67	磁器猪口			3.60(反)	ロクロ	染付・透明	植物？			肥前	18C後～	くらわんか
68	磁器小杯	6.40(反)	5.20	3.20(反)	ロクロ	染付・透明	蝶			肥前	19C中頃	
69	磁器碗	13.50(反)	3.80	8.00(反)	ロクロ	染付・透明	見込:五弁花 外:竹笹	コンニャク印判		肥前	1780～1810年代	筒形碗
70	磁器碗			6.80(反)	ロクロ	染付・透明	植物			肥前	1780～1810年代	広東碗
71	磁器猪口			4.60(反)	ロクロ	染付・透明	つる草？			肥前	18C後～	
72	磁器瓶			6.60(反)	ロクロ	染付・透明				肥前	19C中頃	
73	磁器皿	9.70	2.60	4.70	ロクロ	染付・透明	見込:五弁花 内？外:折れ松葉	コンニャク印判		肥前系	18C後	
74	磁器小皿	9.40(反)	2.85	3.80(反)	ロクロ	染付・透明	格子文？			肥前系	19C代	見込蛇ノ目釉剥ぎ
75	磁器小皿	7.80(反)	1.95	5.20	ロクロ	染付・透明	襷文			肥前	18C末~19C	
76	磁器皿	13.60(反)	4.20	8.20	ロクロ 型打ち	白磁			蛇ノ目 凹型高台	肥前	18C前	菊花形皿
77	陶器皿	18.00	3.80	8.20	ロクロ	染付・透明	草花			肥前	18C後	
78	磁器皿			14.00	ロクロ	染付・透明	龍			肥前	18C	
79	磁器鉢	18.80	8.75	8.90	ロクロ	染付・透明	内:楼閣山水・雷文 外:舟・山水	墨弾き	蛇ノ目 凹型高台	肥前	19C中頃	
80	磁器鉢	18.90	9.30	8.85	ロクロ	染付・透明	内:楼閣山水・雷文 外:舟・山水	墨弾き	蛇ノ目 凹型高台	肥前	19C中頃	
81	磁器鉢	20.6	8.50	12.0(反)	ロクロ	染付・透明	植物 丸文に馬	墨弾き	蛇ノ目 凹型高台	肥前	19C中頃	
82	陶器皿	13.50(反)	3.80	8.00(反)	ロクロ	染付・透明	見込:五弁花 内:蔓草　外:連続唐草	コンニャク印判	渦福 一重圏線	肥前	18C後	
88	磁器碗	9.40(反)	5.30	4.60	ロクロ	染付・透明	梅樹・雪輪		大明年製 くずれ銘？	肥前	18C後	
89	磁器碗			4.00(反)	ロクロ	染付・透明	梅樹・雪輪			肥前	18C後	くらわんか
90	磁器碗	9.30	3.60	3.20	ロクロ	染付・透明	植物			肥前	18C後	くらわんか
91	磁器皿	9.60(反)	2.60	4.80	ロクロ	染付・透明	見込:五弁花 内:？　外:折れ松葉	コンニャク印判		肥前	18C後	
92	磁器猪口	7.90	5.90	5.80	ロクロ	染付・透明	山水	口　紅		肥前	18C後～	焼成不良
93	磁器皿				ロクロ							
94	磁器皿			5.40	ロクロ	染付・透明	見込:環状の松竹梅 外:植物			肥前	18C後	
95	磁器皿	13.40(反)	3.30	7.20(反)	ロクロ	染付・透明	植物？			肥前	18C後	見込蛇ノ目釉剥ぎ
96	磁器皿	9.40(反)	2.40	3.60(反)	ロクロ	染付・透明	？			不明	明治10年代	見込蛇ノ目釉剥ぎ

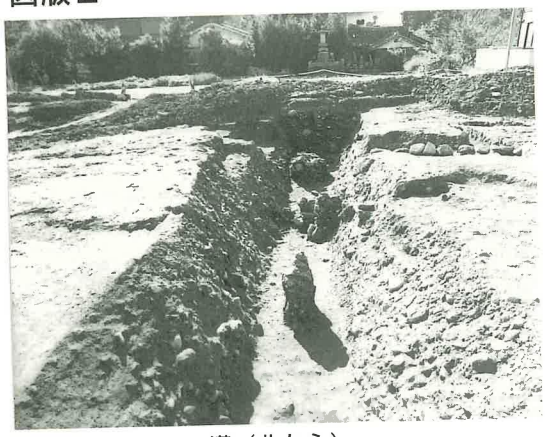
No.	器　種	法　量（cm）			成形	装　　飾			底面内底	製作地	製作年代	備　考
		口径	器高	底経		絵付･釉薬	文　様	装飾特徴				
97	人形											
98	陶器碗			6.10	ロクロ	白磁				中国	12C	Ｖ類
99	陶器鉢			8.50	ロクロ					関西系	19C	目跡６ヶ
100	陶胎碗	10.40	6.70	4.00	ロクロ	染付･透明	山水			肥前	１８Ｃ後	
101	陶胎碗			5.00(反)	ロクロ	染付･透明				肥前	１８Ｃ前	
102	陶器碗	9.50	5.90	3.90	ロクロ	鉄絵･透明	山水			不明	18Ｃ後～	丸碗
103	陶器碗	9.20(反)	5.00	3.20	ロクロ	透明				信楽系	18C末~19前	
104	陶器碗	10.20	5.40	4.20	ロクロ	透明				不明	18C末~19?	
105	陶器碗			4.20	ロクロ					不明	不　明	
106	陶器碗			4.40(反)	ロクロ					肥前	18C後~19C前	見込蛇ノ目釉剥ぎ
107	陶器碗			3.60(反)	ロクロ	透明						
108	磁器小坏	7.00	4.00	2.80	ロクロ	透明					18C末~19前	
109	磁器小坏	7.00	3.90	2.60	ロクロ	透明					18C末~19前	
110	香炉？			3.40	ロクロ	青磁						
111	土瓶orきゅうす	7.20			ロクロ	染付 銅縁 透明	松・山水			関西	１９Ｃ前	
112	磁器土瓶	11.0			ロクロ	透明？		不　明		関西	１　９　Ｃ	

写 真 図 版

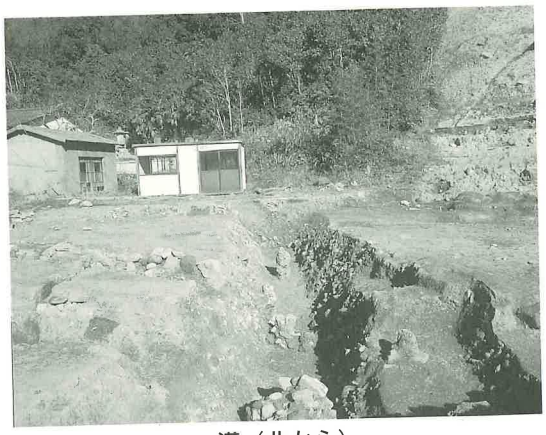
遺跡全景（南から）

遺跡全景（西から）

図版２



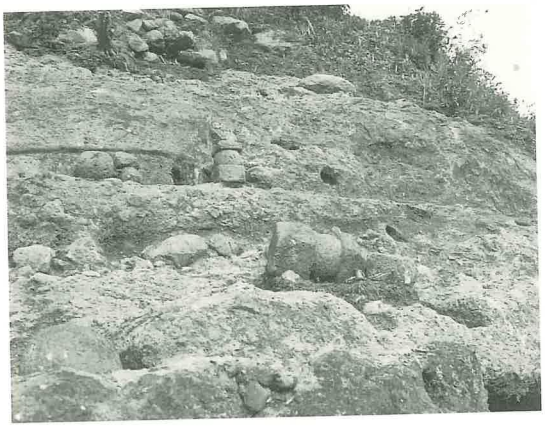
溝（北から）



溝（北から）

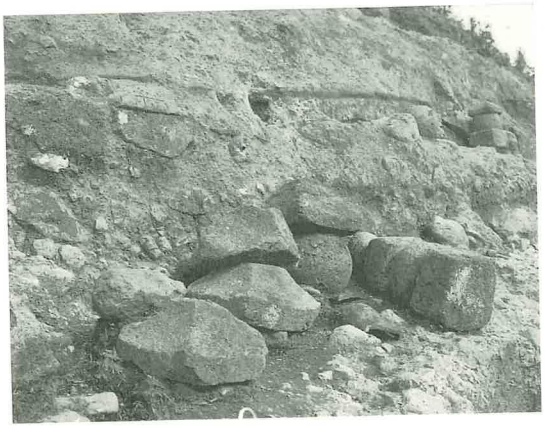
墓壙群近景

第3テラス



第3テラス

第5テラス



第4テラス

第4テラス

第5テラス

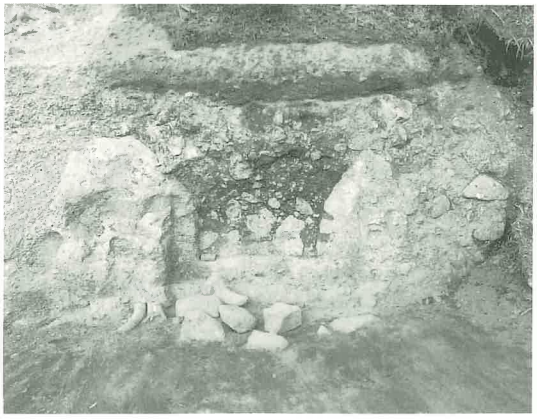
第8テラス

磨崖板碑（西から）

磨崖板碑（東から）

磨崖板碑（部分）

第1号岩屋



第2号岩屋

第3号岩屋（ガラジン様）

図版４

第1号坑検出状況

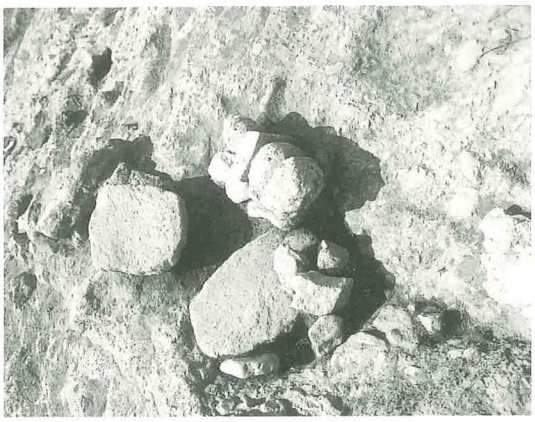
第8（左）、7（右）号

第11（左）、10（右）号

第13（左）、12（右）号

第15（左）、14（右）号

第18（左）、17（右）号

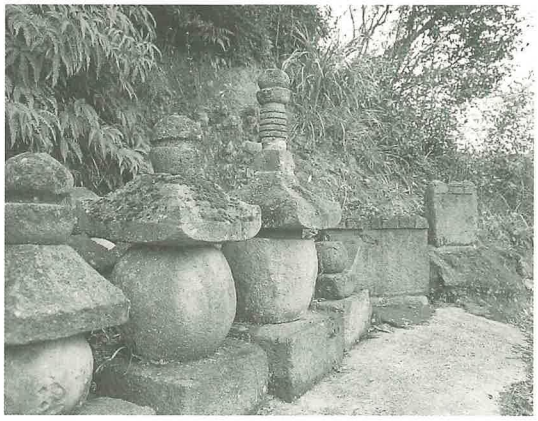


第47、48号坑検出状況

第47（左）、48（右）号

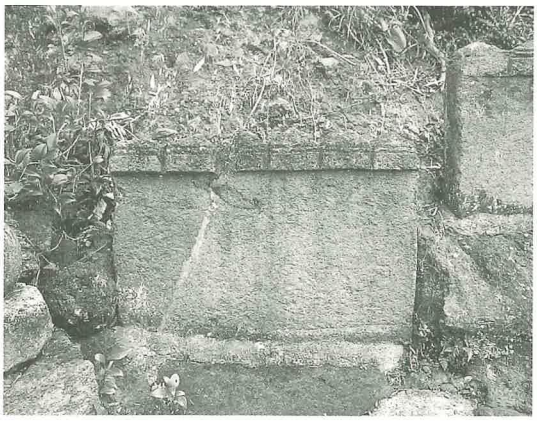
板碑（第16図）

道路跡



清台寺墓地

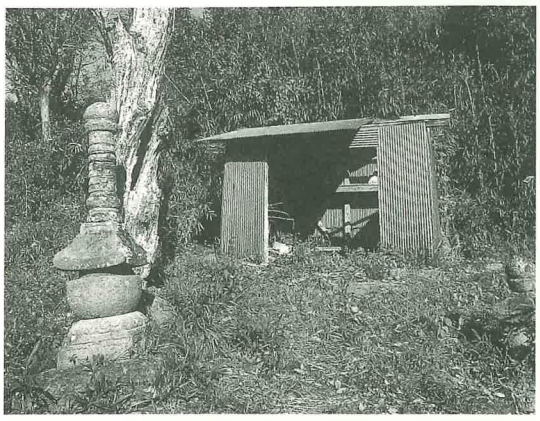
清台寺墓地



板碑3（清台寺墓地）

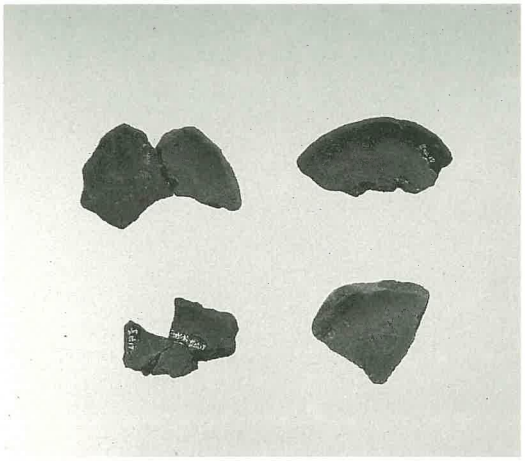
板碑4（清台寺墓地）

清台寺

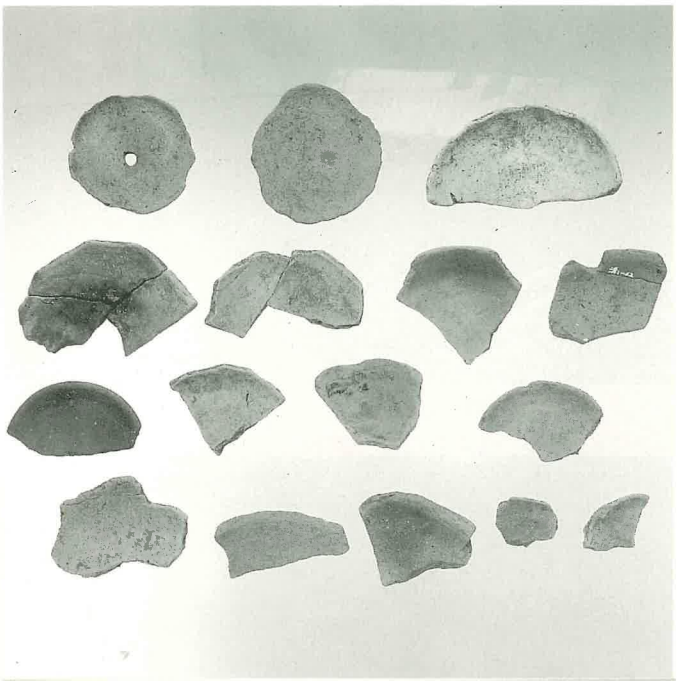


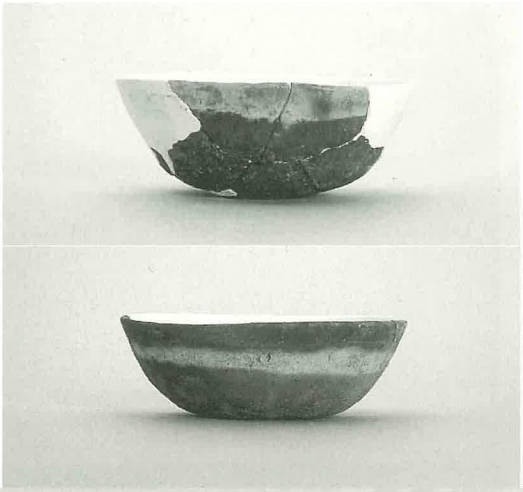
薬師堂国東塔

図版６

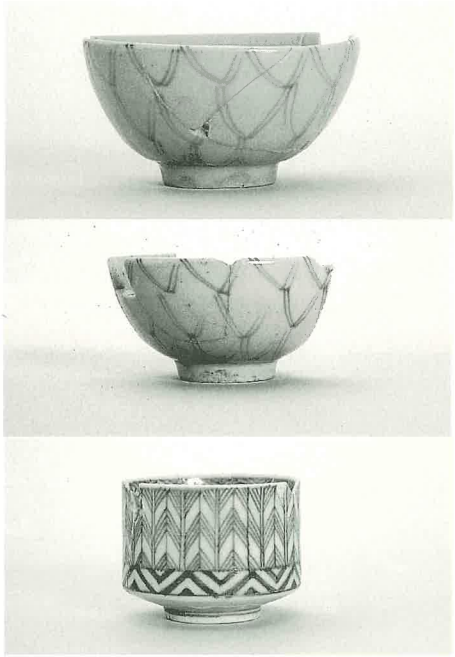


墓坑出土遺物

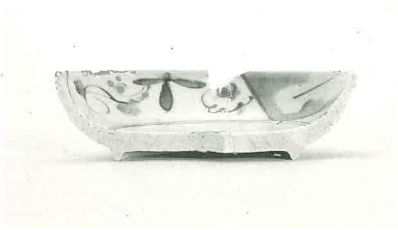


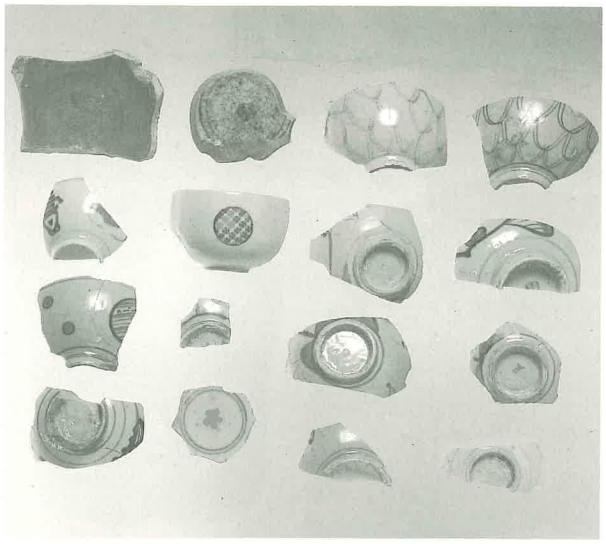
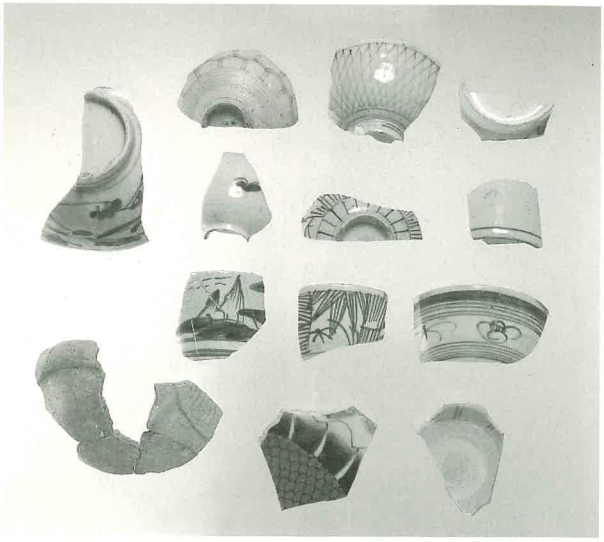
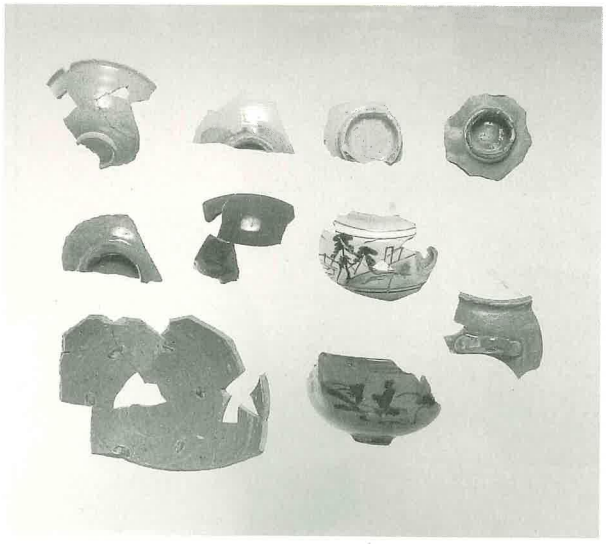
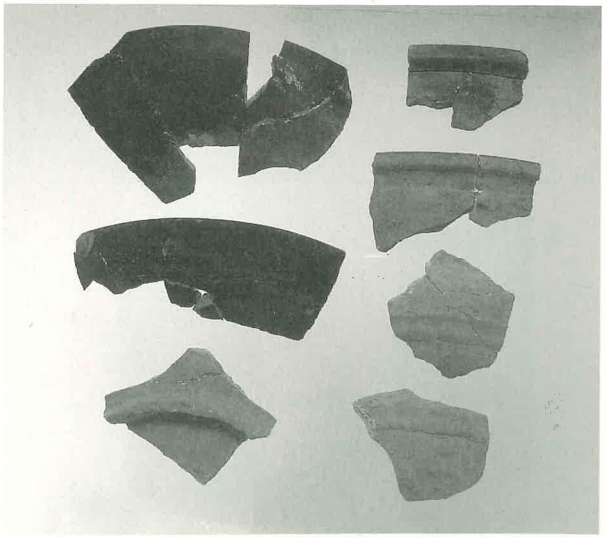


中世溝出土遺物



近世道路側溝出土遺物

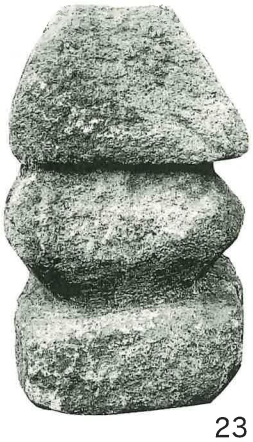


近世道路側溝出土遺物

図版8

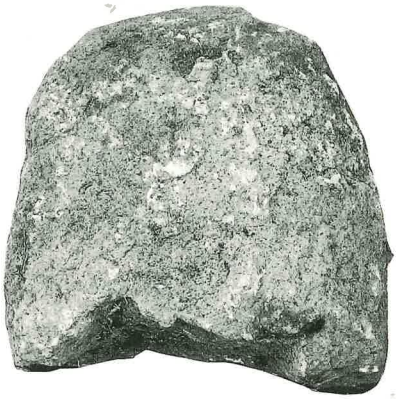
22

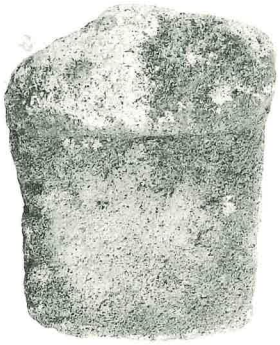

23

24

14

80


15


33

34

36

37

65

報　告　書　抄　録

ふりがな	じょうのまえいせき
書名	城前遺跡
副書名	県道赤根真玉線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
巻次	
シリーズ名	大分県文化財調査報告書
シリーズ番号	第130輯
編著名名	小柳和宏
編集機関	大分県教育委員会
所在地	〒870－8503　大分県大分市府内町3丁目10－1　TEL097－536－1111
発行年月日	2001年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
じょうのまえいせき 城前遺跡	またまちおおあざじょうのまえ 真玉町大字城前字フチ	44302	111054	33°35′	131°31′20″	990906 ｜ 991224	800m²	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
城前遺跡	墓地	中世	溝 墓坑	土器類 陶磁器類 石塔類	

大分県文化財調査報告書　第130輯

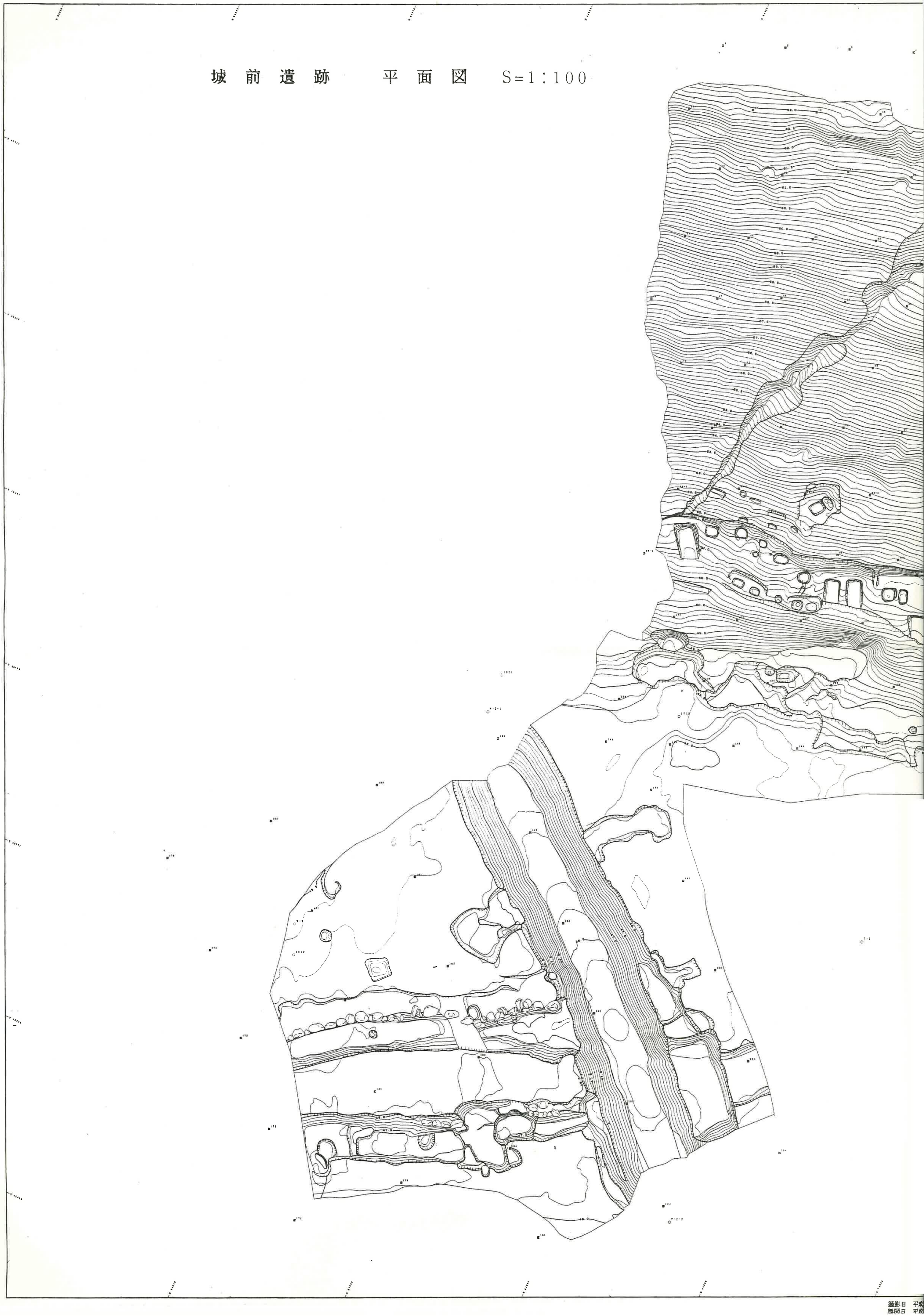
城　前　遺　跡

－県道赤根真玉線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－

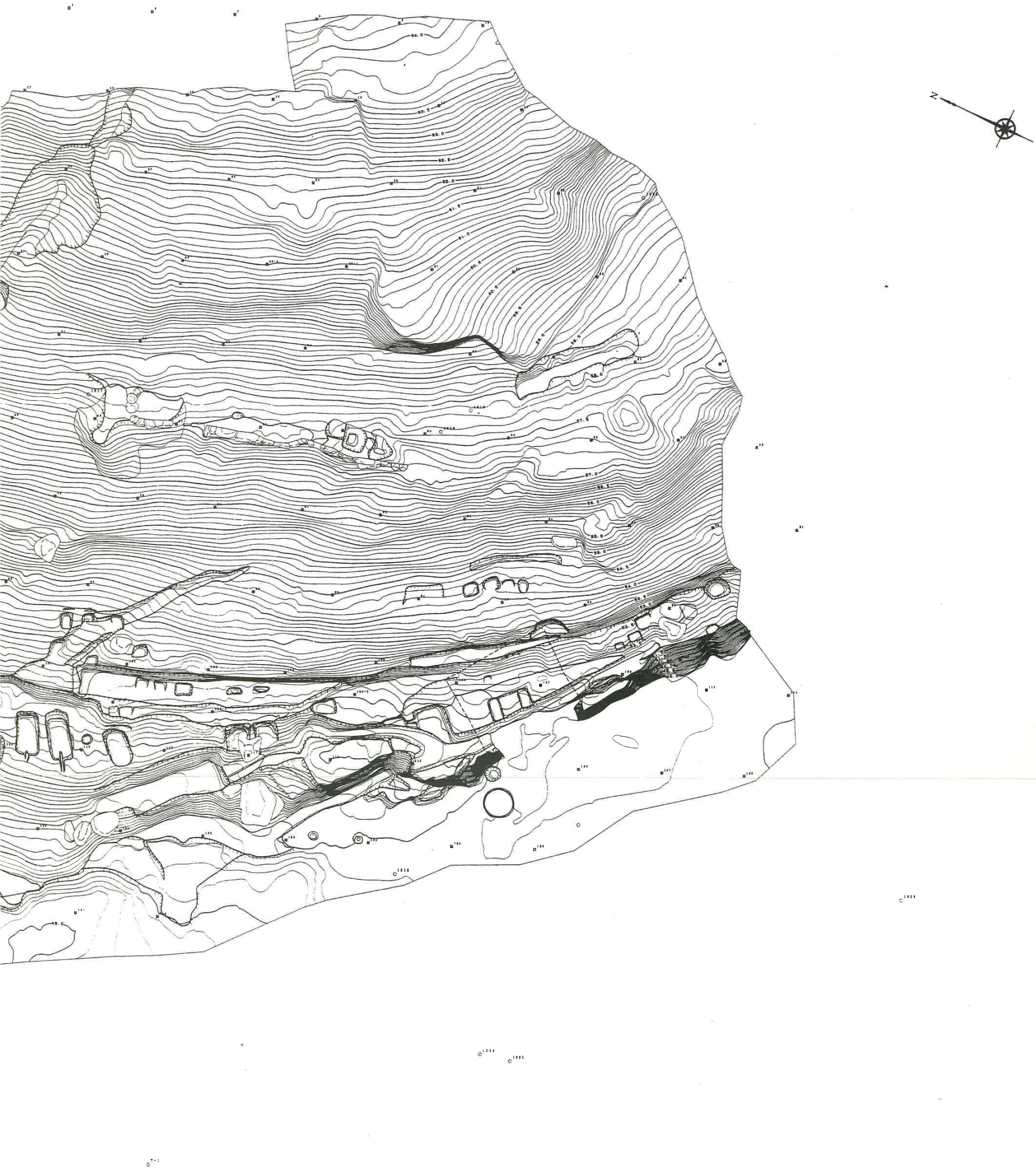
2001年3月31日

発行　大分県教育委員会
〒870－8503
大分市府内町３丁目10－1
0975－536－1111（内5498）

城前遺跡　平面図　S=1:100



撮影日　平成
製図日　平成



((大分県文化財調査報告書
第130輯　城前遺跡)) 付図

大分県教育庁　文化課
1年12月22日
2年　2月29日